

---

# 悠久のエリアス～潮騒《Paranatura》～

天之真夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悠久のエリアス〜潮騒《Paranatura》

### 【Nコード】

N5149Q

### 【作者名】

天之真夜

### 【あらすじ】

至高なる神々が生み出した悠久の異世界、はじまりは幾千年と時を経たとある港町。帰途の商船に乗っていた一人の青年は、『神々の使者』古代人と呼ばれる妙な格好の娘を助けた。かたや娘は自分の置かれた状況に驚き、戸惑い、恐怖を覚える。夢であって欲しいと強く願った。なぜなら自分は、海に落ちる前まで確かに高校で部活にいそんでいたはずなのだから……。大人びているようでどこか子どもっぽい大商人の跡取り息子と、合唱部に情熱を燃やしていた現代女子高生を主人公に据えた、それぞれの価値観と視点が交

差する異世界日常系ファンタジー。

そのうち年代別にオムニバス化させたシリーズを目論んでいます。作中に登場する詩歌をまとめた『Whyur・Apocaly p s e 』 <http://ncode.syosetu.com/n5151q/> も随時更新中。

## 1・幕開け

Unir , Prologior . (幕開け)

その夜、沖の海には靄が立ち込めていた。

剥き出しの頬が柔らかな寒さに時折痛む、晩秋のことである。

一隻の商船は、水気を孕んだ農灰の世界を掻き分けるようにして恐る恐る進んでいた。船員たちが掲げるランプは闇にいくつもの白い線を残しては遠くで途切れ、板張りを往復する無数の靴音は潮のうねりにかき消される。その船尾甲板の片隅には、じっと前方を見据えるひとりの青年が佇んでいた。

彼の記憶が正しければ、この辺りの海は比較的穏やかで、霧や靄などが発生したことはほとんどなかったはずだ。何が起こるか分からない海上で『自らの経験こそが正しい』などと高を括っているわけではないにしろ、どうしても仄暗い、さざ波のような懸念が捨て切れないでいた。

彼は不安だった。この視界の只中にいると、途端に昨日故郷から届いた親友の手紙さえ暗示めいたものに思えてならない。

『こちらは万事問題ない』

考えすぎだ、杞憂に過ぎぬと振り払おうにも一度抱いた感情はそう簡単に立ち直ってはくれない。

月も星も隠れた夜。ネネイ ラカリス胸の奥底まで迫るかのような重い靄が、彼の心をよりいっそう深く苛んでいる。

何しろ、まさか自分が商長として率いる初めての商談を終えた帰

路にて、このような歓迎が待っているとは思ひもよらなかったのだ。

普段ならばそろそろ見えてくるだろう岬の大きな灯台と、波打ち際に並ぶ家々の放つあたたかなオレンジ色が両手を広げて、長い船旅を終えようとしている彼らを出迎えてくれるはずなのに。

苦心の末、若き商長はいったん戻るべきだと言う船長の言葉に首を振り、真っ直ぐ突き進もうと声を荒げた。目的の港へはそう遠くなく、灯台さえ確認できればうまく運ぶと信じての主張だった。

いまだにこの決断が果たして良かったのかと悩み続けている。しかし船長を始め船員たち、そして商団の皆はそんな彼に黙って従ってくれている。彼らの人生と商団の命とも呼べる積荷を一手に預かる身として何が何でも無事帰らねば、と青年は自らに言い聞かせ、踵を返して甲板を歩き始めた。

相変わらず船の歩みはゆるゆると足元を探るように遅く、まるで目隠しをされた幼子のようにおぼつかない。

j z a g o o h j z a g o o h . . .

(さあ漕げ さあ漕げ)

颯爽と歩く商長の姿を認めるや、団員が遠慮がちに頭を垂れ、船員たちは忙しく動かしていた手を一瞬休めて睨みつけるように注視する。彼は一人ひとりに対して挨拶を交わし、なおも長靴を鳴らした。すると突然、向こうから野太い歌声が聴こえ思わず足を止める。

E g / e e m a a m a n t p h a r y d i n e .

(我が愛しの故郷)

船全体を覆っていた緊張感やら不安やらを丸ごと吹っ飛ばすほどの能天気な歌声。しかもそこそこ上手いのが尚更迷惑甚だしい。青年は口唇を引き結び、床が軋むほど強く踏み進んだ。波飛沫が舞い、彼のくすんだ金髪を左右に揺らす。

辿り着いた船首、その船楼にいたのは、見えぬ海原と大陸をひたすら凝視しているように見える男——の背中だった。

N i n n a v e r ' p h a r a l e n t m a l o n d a  
n a o h a w g i ,

(帰途の道はニンナヴェルの灯が教えてくれる)

n a o t u h a w g i n y y k e e o .

(窓辺に佇むお前の下へ)

「…あいにくだが、今夜はまだ待ち人どころかニンナヴェルの灯台すら拝められない。場違いな歌はやめるんだな、マラノ」

マラノと呼ばれた壮年の大男は、咎められて振り返ると同時に悪人面をくしゃくしゃに綻ばせた。

「歌ってりゃあ灯台のてっぺんでも出て来てくれるんじゃないかと思ひましてね。ほらこっやって」

そう応えるなり右手に摘んでいた遠眼鏡を目元へひょいと当ててみせる。目線を滑らせれば、筋肉質な右腕の影には船員服を着たひ弱そうな少年が、怯えた表情でこちらを見上げていた。なるほどそ

ういうことが、と商長は再び男を見やる。

「それに船の奴らときたら、行かつて決めたくせにビクつくなんざ情けねえや。おれは愛する娘に会いたい一心で、今すぐ飛び込みたいのを必死に耐えてるってのに」

「だから代わりに見張り番として働いているというわけか。困ってるだろう、早く返してやれ」

顎をしゃくった商長に倣うまま右腕を確認したマラノは、たった今気づいたかのような反応を見せつつようやく『それ』を手放した。安堵のため息を投げ仕事を再開する少年を横目に、ふたりは船首楼の脇へと移動する。先ほどよりは靄が薄くなっただろうか。どす黒さを増した海に差す白い光をぼんやり目で追いながら、青年は誰にでもなく弁解するように呟いた。

「……皆には申し訳ないと思っている」

船員たちが怯えながら働かなければならないのも。船底の積荷庫にて団員たちが命懸けで商品に傷がつかぬよう不眠不休で守っているのも。彼らの不安を煽ったのは自分、全ての責任は自分にあるのだと青年は続ける。初めて味わう重責に微かな悲鳴が漏れ出た瞬間だった。

「坊ちゃん。カシラってのは、たとえ心で詫びていようと決めてそれを口に出しちゃあいけませんぜ」

しかし聴き手の男はその悲鳴に対し慰めるどころか、強い口調で言い咎める。

「特にここは場所がいけねえ」

誰が聞いているか分からないのだ、とでも言いたげに辺りを見回し、最後に傍らに立つ青年の正面へ向き直った。

「坊ちゃんだつて今までに何度か、お父上の取引に付き添われてるのでご存知でしょう。損なり得なり、商団が得た結果の全てを商長が負うのは当然のことです。商談の成り行きはもちろん、道中の苦勞も、担ぎ手や護衛の振る舞いに対する相手方の評価もゼーんぶ被さってくる。どんな結果になろうと、そいつらを残らず受け止めてやるのがカシラつてもんだ。だから坊ちゃんは、後々どんなに悔やもうが一度決めたら絶対に迷う素振りを見せちゃならねえ」

信頼されるべき商長が判断を覆せば、部下の混乱を招く。混乱は不信を呼び、やがて集団を散り散りにさせかねない。責任者たる者、常に大海のごとく悠々と構えていなければならないという年長者の戒めに、青年は噛み締めるように耳を傾けていたが、しばらくすると自嘲気味な苦々しい笑みを零した。

「——やっぱり、お前が商長を任されるべきだった。私は結果を受け入れるどころか、自分が決めたはずの行為ひとつ貫き通せずにくうして弱音を吐いている。いくらベッケナー商会を束ねる頭領の息子とはいえ、商人としての能力はまだまだお前に及ばないだろう」「まさか。おれは単なる世話役ですぜ、そんなこと仰らないでください。それに心配はご無用です。坊ちゃんの才能はこのマラノがしかと見定めさせていただきやしたから。商談の卓で、ごねる相手をバツバツサとねじ伏せる凄まじい話術！ いやあ、まさに大蛸を手なずけるウルディノ神を見てるようで感服しやしたぜ。さすがはデビス様のご長子だ、ワッハッハ！」

夜空に豪快な笑い声が響き渡り、周りにいた者らはギョツと肩を

竦めて顔を向ける。青年もまた、堪え切れず頬を緩めた。マラノは父を支える副頭領という地位にしながら、商会一の調子者であり人氣者でもある。青年自身、幼少の頃からもうひとりの父親のように慕っていたこともあつてか、この男の気立ては嫌いではなかった。

しかし彼は知っている。世話役と自らをへりくだるこの男が、実は頭領から命を受けた自分の目付け役であることを。取引のための準備から経路の選択、そして費用の落とし所までを逐一監視していたことも。おそらく父へ報告するのだろう。自分が商長として相應しい資格を持っているかどうか、この先も商会全体の要を担っているのかどうか。試しているに違いない。

そうとは悟られぬよう、青年は取り繕つて応えた。

「すまなかつたな。少しばかり弱気になっていたようだ」

「いえ、おれの方こそ口返答が過ぎちまいました。何せ、あんなに泣き虫だった坊ちゃんがこうしてご立派になられたかと思うと、つい嬉しくなつちまつて」

「昔の話だろう。それに『坊ちゃん』もいい加減よしてくれ。私はもう甘やかされるだけの子どもじゃない」

「へえ。気をつけます」

恭しく礼をするマラノから視線を外し、上体を振りながらゆつくりと周りを眺める。

「……どうやら霽が晴れてきたみたいだな。案外、お前の歌が海洋神に届いたのかもしれない。これで灯台の明かりが見えれば——」

「そういうことならお任せくだせえ、もう一度歌つて根こそぎ消してもらいましょう」

そのとき青年が呆れ顔で「やめろ」と横の逞しい二の腕を掴むのと、海洋神ウルディノもしかめ面を浮かべかねない調子つ外れの歌声が飛び出したのと、甲板が俄かにざわついたのはほとんど同時だった。

「いけねえ、喉が掠れちまった。今度こそ」

あちこちから「ニンナヴェルの村だ」「灯台が見えた」と騒ぎ立てる歓喜の声が聴こえてくる。灰色から漆黒へと変わりつつある世界に差した輝かしい光。皆がこの光を待っていたのだ。若き商長はマラノの坊主頭から朝日のように顔を出す灯台を目の当たりにすると、未だ瞑目して喉を震わす副頭領の腰骨を思い切り叩いた。

「やめろマラノ。折角の明かりがお前の地平線に沈んだらどう責任を取るんだ」

「へっ？ おお！ ついにニンナヴェルまで来たんですかい」

「団員を積荷庫に集めろ。降りる準備だ」

「へえ、ロイス様！」

取舵一杯、の号令のもと船首が左へ傾き、商船の行く先にもはや迷いはなかった。ニンナヴェル村の家々が灯すあたたかなオレンジ色を右手に、一路彼らの故郷であるデルバルゾ・マレーアへ。海洋同盟随一の都市。そして最大の交易拠点とも謳われる港湾、マレ・ポルトガの長い栈橋が、あと半刻もすれば暗がりに見えてくるはずだった。

走り去るマラノの背を送った商長は、先ほどまで胸を苛んでいた懸念がすっかり消え去ったのを感じた。灯台さえ確認できればうまく運ぶ。自分が言い放った主張に対して何とか結果を残せたことと、商会全体の面目を保つことができ安堵したのだろ。安心しきるに

はまだ早いが、やっと肩の荷が降りた気分だった。今までは船が揺れるたびにぶつかる海水の冷たさにさえ不安を覚えていたが、それももうない。

込み上げてくる笑みを必死に耐えるうちに微妙な表情を浮かべる姿が、ようやく年相応の若者らしさを示していた。

船に乗っていた者たちの中に靄の原因を推し量ろうとする者は誰もいなかった。

待ちかねていた希望がすぐそこに現れた今、彼らは己の領分のごとくひたすら故郷への帰路を辿るだけであった。家族のために、恋人のために、あるいは利益のために生きて帰る。常に危険と隣り合わせである船旅において帰る場所が目前へ迫ったことは、最後まで気を引き締めなければならぬ緊張感とともに甘美な油断をもたらすものでもあった。

突然、船が震える。

天上から響く澄んだ鐘の音とともに、商船が、海が、空気が、大地のすべてが確かに震えたのだ。まるで波打つ調べに応えているかのように。

マラノに遅れて船内へ向かおうとした途端、鐘音を耳にした青年は足元から凍りつくような寒さを覚え全身が粟立った。そしてそれを感じたのは彼だけでなく、周りにいた数人の船員たちも呻き声を上げてその場に固まった。

「ラカリスナーエ  
彗星だ！」

見張り役の少年が振り絞るように叫ぶ。間髪入れずに船内から何

事かと大勢が飛び出してきた。彼らや青年を含めた皆が少年の声を受けてサツと夜空を見上げると、幾重にも連なるオーロラの中央には、キラキラと尾を牽く大きな流れ星が走っていた。

この世のものとは思えぬ光景だった。どこまでも神々しく恐ろしい、打ち鳴らされる音色とともに揺れる七色の織物とそこを切り裂く一筋の光。

甲板に立ち尽くす者たちは皆これが何を意味するのか心得ている。否、実際に一度目にしたことがある年長者と、書物や絵画でしか教わったことのない若者とは多少見解に食い違いがあるだろうが、少なくとも両者は何が起きたのか瞬時に理解した。

「……<sup>ソーラー</sup>古代人、まさかもう一度この目で見られるとは」

青年の近くにいた白髪混じりの船員が漏らすように呟く。  
偉大なる神々の魂を身近に感じるができる最も崇高な機会。  
十数年に一度だけ訪れる古代人の招来。神の揺りかごに包まれて、  
今まさに産土へ降りたたんとしているのだ。

「ヒエー！ まさかと思って出て来たがこりや大正解だったぜ」  
「マラノ。お前も二度目なのか」

若き商長は遅れてやってきた大男の気配へ振り向きもせず呼びかけた。天を仰いでいた両腕をそのままに、マラノは夜に浮かぶ金髪を見下ろす。

「へえ、仰るとおりで。坊ちゃ、おつと失礼ロイス様がお生まれになる前だから、もう十八年位エ昔の話です。あの頃はおれも生意気な若造でしたよ。しかしロイス様。この音、ひよっとすると出処は『あそこ』じゃねえですかい？ 星が落ちる方角からしてみても、

「もしや——」  
「言うな」

ピシヤリと一喝した青年は、真剣な面持ちで辺りを見回し始める。誰も彼もが目を見張り、大きく口を開けて空を見上げていた。きつと今頃はどこの街を探しても同じ様子の人間の人間で溢れているに違いない。そしてこの船に乗り合わせた者たちと地上で見ている一部の人間たちは気づいたはずだ、と人知れず眉を潜めた。

鳴り止まぬ鐘の音が一体どこの街の神宮で響いているのか。彗星はどこの街に落ちるのか。

「マラノ」  
「へえ」

青年は先ほど彼に命じた指示を取り消した。その代わり、といかつい肩に手を乗せて耳打ちする。新たな命令を受けるなり、相手は思わず声を上げるほど驚いた。

「ええっ？ 本気ですかい」  
「大声を出すな」  
「へ、へえ。しかし、そううまくいきますかね」  
「いくさ。抜かりなくやれよ」

まもなく船はマレ・ポルトガを目指し再び加速する。夜空に映えるオーロラと今まさに燃え尽きようとしている地上の星を前方に見据え、ニンナヴェルの灯台を右の懷に抱きながら迷いなく進んでいく。

青年は船首甲板の片隅に佇み、じつと星の行方を見届けていた。

——父へ最高の土産ができた。

そう心に思う彼の表情は、責任に耐える商長の顔でも喜びが滲む若者のものでもなく、小さな野心を秘めたひとりの男のようだった。

「うまくいかなければ、商人としての才が俺に備わっていないだけさ」

デルバルゾ・マレーアを代表する商人の息子、ロイスは大海原に向かつて言い放つ。その言葉をただひとり聞いていた見張り役の少年は、ちらりと盗み見ては首を傾げた後、遠眼鏡越しに港の灯光を見つけ右手を高く掲げた。

## 1・幕開け（後書き）

はじめまして、天之和申します。今までは電脳世界の片隅で細々と2次創作小説を書いていましたが、このとおり1次小説への門を叩かせていただきました。とにかく脳内に巡っている最終話まで（途中の紆余曲折は否めないにしろ）きちんと書ききることが目標です。どうぞよろしくお願いいたします。

### 【今回登場した単語】

- ・ネネイ n e n e i：月
- ・ラカリス l a c a r i s：星
- ・ラカリスナーエ l a c a r i s n a a e r：流れ星、彗星（転じて地上に降りて来た古代人が描く光の尾を指す） l a c a r i s（星）+ n a a e r（落ちる）
- ・ソーラー s o l r a a r：「鐘を鳴らす人」から転じて）古代人の総称

## 2・もうひとつの始まり

noh・Sills on o un de o c c・(もうひとつの始まり)

春休みが明けて、今日から私は高校三年生になった。

巷じゃ『受験生』と呼ばれるようになったのかと思つた矢先、早速先生がホームルームの最後に進路アンケートの用紙を配り始める。ざわつく教室の中、隣の男子が「いきなりかよ」と不満を漏らした。そつだそつだ、いきなりだぞ。私も口を尖らせてささやかな反抗を試みる。

「今年の放課後補修は進学組と就職組に分けるから、そのための進路確認だよ。今文句垂れてる奴も忘れずに提出するように。言つとくけどもう去年みたいな白紙は認めないからな」

認めない。先生の放つた冷ややかなパンチが私の腹に決まる。

「それに最終学年になったんだから、いい加減進路を決めてない奴は最低でも進学か就職かくらい考えてこいよ」

最終学年。それなのに進路を決めてない。鮮やかで的確すぎるボディブローがみぞおちにヒットし、私は泣きそうな思いで前の席から用紙を受け取った。壁際の派手な声の女子が「センサー、ひどい！」と嘆いたのに対して「相談があるなら乗ってやる」と窓枠に寄り掛かつて腕組みする先生。言い方が少しきついでに、悪い人で

はない。実際親身になって相談に乗ってくれるし。

でも。進路、進路か……。名前欄とチェック表、その下の具体的な進路先を記入する欄を舐めるように見て、四つ折りにしたそれを鞆にしまつ。チャイムと同時に日直が号令をかける。のんびり帰る準備をする生徒、部活へ急ぐ生徒、グループを組んでお喋りを始める生徒たちで騒がしくなった放課後の教室をあとにした私は、とりあえず友達を迎えに行くため二つ隣の教室へ向かった。

二年生だった私は進路を白紙のまま提出していた。親を交えた面談でも「まだ決めてない」と突っぱねた。そのときはあれで良かった。

でも、もう同じ手は通用しない。一年後の私がどこへ進むのか、漠然とでもいい、決めなくちゃならない。でも分からない。そんなことを考えてられなかった。何故なら、去年だって今だって……。

「サキ！ 今日新入部員来ると思う？」

出入口に近い席で楽譜を揃えていた友人は、空元気にも程がある私の言葉に顔を上げるなり呆れたように低い返事をした。

「……ミツル、そっくりそのまま返す。入学式が終わってすぐの新入生が、見学もなしにウチに来ると思う？」

「ごめん。ちよつとした言い間違い。ねえサキ、今日、かわいい見学者たちが何人来てくれると思う？」

新部長の美咲は一瞬真顔になったあと楽譜をファイルに挟みながら、「五人くらい来たら良い方じゃないの」と冷静に応える。私たち合唱部は、吹奏楽部と並び文化部の二強として新入生の勧誘に力を入れている。そして何故か毎年、一方に集まればもう一方が部員不足に悩まされるという妙なジンクスがあった。去年うちが大豊作

だった分、今年は吹奏楽にこつそり持っていられるだろう。私は腰に手を当てる考え込むように言った。

「一応昨日のミーティング通り、中村ちゃんと小島ちゃんに行ってもらってるよ。どこまで引つ張って来れるか分かんないけど……。ほら、あんまりしつこいと逆効果じゃん？ ブラバンの勧誘の様子も見て、そこは臨機応変でお願い、とは喋った」

「うん、毎年新入部員のほとんどは大人しめな子たちだから、変にうるさいとマイナスだしね。ありがと、ミツル。今年は仕方ないと思って、出来上がったメンバーで行くしかないよ」

「そうだね。どんなメンバーだろうと目指すは金賞！」

「ミツル、うるさい」

私たちはクスクス笑い合って教室を出る。そう、去年だって今だって、私は部活動にすべてを注いできたのだ。コンクールではずっと銀賞止まりで悔しい思いをしてきたけど、いつか必ず金賞を掴み取ってみせる。それこそ寝る間も惜しんで練習に励んできた。今更進路だなんて、そんなの考えてる余裕もなかった。私の頭は音楽のことで一杯だったんだから。

今が楽しい、それだけじゃいけないんだろうか。いやダメなのは分かっている。けど進学か就職かなんて、考えたこともなかったものをすぐには決められないよ。

合唱部が好き。音楽が好き。好きなものに皆で一所懸命取り組めるこの環境が何よりも大好き。……これしか答えられない私に、一体どうしろっていうんだろう。

「いつそのこと音楽学校、て書きちゃおうかなあ」

「ん？」

「ううん、何でもない」

視聴覚棟の廊下では一足先に吹奏楽部のパート基礎練習が始まっていた。三階の音楽室へ向かう階段を並び歩く途中、ふと美咲側に持った鞆の中身を思い出す。――帰ったときにでも、サキにメールで訊いてみようか。学年トップの彼女はきつと迷わず大学進学を選ぶだろうけど、きつと私の悩みを受け入れてくれるに違いない。

\*

見学者は部長の予想通り、六人の新入生が来てくれた。疲れた笑顔で入ってきた勧誘役の後輩へ私たちはねぎらいの歓声を上げ、新入生を心から歓迎した。この中から何人が入部届を出すのかはまだ分からないけど、前向きに精一杯がんばっていくしかない。

部活終了後、美咲は顧問に呼ばれているとかで先に帰ってくれと後輩から伝言をもらった。音楽室の時計は午後七時半。新学期初日だろうと一切手を抜かない部長と顧問ペアに内心拍手を送りつつ、だるい体にカーディガンを引っ掛けて退室の挨拶をする。季節はすっかり春だというのに、外が曇っているのか扉を開けたら薄気味悪い闇が目に飛び込んできた。

視聴覚棟の暗闇くらい見飽きているはずなのに。どうしてなのかゾッとしてしまった。……おかしいな、小さい頃から怪談系は平気な方だったんだけど。

いったん怖いと思ってしまえばどんなにごまかしても無駄だった。晩御飯のおかずを推理しても今夜観たいテレビドラマを思い描いても怖いものは怖い。けれど挨拶までした手前、背中越しの扉へ戻るのも何だか恥ずかしい。しばらくの間怖い、恥ずかしい、やつぱり怖いと延々繰り返して、結局私は誰か見ているわけでもないのに強がることにした。

古びた蛍光灯が照らす階段を一目散に駆け降りる。自分が立てている足音なのにどうして後ろから追いかけられているような気がするんだろ。心臓が痛いくらいに胸を叩いている。怖くて怖くて、とにかく何が何でも早く帰りたくて、私は教室棟へ続く渡り廊下を抜けると職員室の明かりも無視して生徒玄関へ急いだ。

良かった、ゴールに辿り着いた。もう少しでここから出られる。息を整えながらスニーカーに履き替えたあと、ガラス戸をくぐる前に何度か深呼吸を試みた。……肺活量を鍛えるトレーニングにもなるし、どうせだから家まで走って行こうかな。安心感からかなんことを考えられる余裕が生まれた私は玄関の向こう側に目を凝らした。真っ直ぐ校門へ続く道の両側には何本もの夜桜が花びらを散らしている。外灯の明かりに照らされて白く浮かび上がる木々はとても幻想的で、朝の賑やかさとは大違いだった。少しの間ボーッと見惚れたあと我に返り、鞆を小脇に抱えてきつく握り締める。よし、行こう。

桜に吸い込まれるように二歩、三歩と進んだのは良いものの、私の決意は踏み段を降りた瞬間真つ二つに折れてしまった。アスファルトを蹴るはずだった右のかかとが宙を掬う。

「あれっ」

何故なら走って帰るつもりだった両足が、今は体ごと夜の底へ真つ逆さまに落ちたのだから。

私は声の続く限り叫んで叫んで必死に理解しようとした。まるで昔遊園地で体験したバンジージャンプの百倍怖いやつを味わっている気分。一体私の身に何が起きているの。終わりが見えない、ひ

たすら暗闇だけの世界を切り裂くようにして私独りが落ちている。  
一体どこからどこへ。

怖かった。違う、恐怖以上に混乱していた。これは夢なんだろう  
か。どうか嫌な夢であって欲しいと願いながらも、私は頭のどこか  
で確信していた。決して夢なんかじゃない。耳を裂く風の音や制服  
のはためき、そして喉を震わす感覚は間違いなく現実のものだった。  
ましてついさつきまで身を置いていた教室での出来事も部活動も、  
夢であるはずがない。

叫び声は喉の痛みとともに呻きへと変わり、私は涙をボロボロ零  
しながらしゃくり上げた。どうしてこんなことに。美咲の帰りを待  
っていれば良かったんだろうか。それとも進路を決めていないのが  
いけなかったんだろうか。分からない。何を考えても答えは過去の  
自分の過ちに対する懺悔になる。家族の顔、部員たちの顔が次々と  
脳裏に浮かんで謝りたい気持ちで一杯になって、私は背中を丸め  
胸に抱いた鞆に顔を押し潰すようにして泣いた。  
死にたくない。死にたくないよ。

——十分経ったのか一時間経ったのかは分からないけれど、そう  
しているうちに目の前が別の意味で暗くなった。自分でも気づかな  
いうちに失神してしまっただろう。意識の中での私は叫んでいなか  
ったし泣いてもいなかった。ただ、気を失ったのなら死んだとき痛  
くないかなあと間抜けなことを思っていた。

そして私は本当の意味での夢を見た。

ある一点が青白く光ったかと思うと、黒い世界が真っ白に塗り変  
わった。光は青から緑、緑から黄色とどんどん色を変えて、放射線  
のように七色の筋を作り出す。七色の尾が白い世界を覆ったとき、  
私はどうしてだか猫型二足歩行ロボットが乗り込むタイムマシンを  
思い出した。私もどこかの時代へ飛ばされるんだろうか。

鮮やかな世界が今度はカーテンのように揺らめいたと同時に、風の音に混じってカランコロンと静かに鐘を鳴らす音が聞こえてきた。こんな綺麗な音初めて聴いた。この上なく優しく、とてつもなく悲しい。延々と響く鐘の音が胸の奥にじわりと滲み、私は耐えられなくなって目を閉じた。

「——来たれよ異界<sup>ソーラー</sup>人。貴様の生地を選べ」  
「え？」

低い男の人の声がして辺りを見回してみても誰もいない。すると突然激しい頭痛が私を襲い、頭の中に見たこともない映像が現れてはカメラのフラッシュみたいになんか切替わっていく。

鬱蒼とした森を逃げ回る動物、それを追いかける人間たち。刺青だらけの浅黒い腕が弓矢を構えた瞬間、空から真っ赤に燃える隕石が落ちて地上を焼き尽くした。草も水も何もない、灰色の世界。荒れ果てた平原を寄り添うようにして歩く人たちはさっきのとは違い、頭からフードを被っていてみんな疲れきった様子だった。

場面が変わる。あんなに荒んでいた景色が嘘のように元通りになっていた。それどころか空も海も大地も、そこに暮らす生き物全部が生き生きと輝いている。街の人々は笑いながら歌って踊って、これを幸せと呼ばずに何と言っただろう。

けれどその人たちはやがて争いを始める。人と人がぶつかり、国と国とがぶつかり合って世界を壊す。凛々しく戦場を駆ける騎士も、焼け出された子どもたちを守るお姫様も死んでしまった。戦争を鎮めた英雄でさえ、最後は自分の手で国を滅ぼしてしまった。戦いを起こす理由はいつも自分勝手で、どんな結果になろうと悲しいだけなのに、どうして人間は同じことを繰り返すんだろうか。

夢の中で私は、歯を食いしばって泣くのを堪えた。

「こんなの見たくない。選べって何なの。私にどうしろって言うの」

怖いわけでも悲しいわけでもなかった。ただ胸の奥がとても痛い。言葉では説明できない苛立ちが溢れそうになって、私は姿のない声の主に向かって必死に喉を絞った。合唱部が聞いて呆れるくらいの掠れた声が出た。

気づけばとつくに鐘が鳴り止んでいた。それでも映像の流れは止まらない。見渡す限りの草原を三頭の馬が人を乗せて走っている。旅装束風の若い男の人たち。向かっているのは、湖に建つ大きな塔だった。映像は塔の壁に沿うようにして天高く昇り、真っ青な空がどんより曇ったかと思うと何本もの稲妻を落とす。黒い空からは雪が………違う、これは灰だ。たくさん灰が地上に降り積もっていく。命の上に覆い被さる灰のように、私の頭の中の映像も灰色に埋まっていった。

そして押し潰された意識の中で確かに聴いた。

穏やかな風が荒原の砂をさらう音。豊かな木々の葉を揺らす音。鳥たちの鳴き声。

頭上に差した眩しい光に顔を上げるといつの間にか満天の星空が私を見下ろしている。

どこからともなく押し寄せる波の音を背に、不思議な気持ちで辺りを眺めたそのとき、夢心地の感覚がブチリと途切れ私は両目を無理やりこじ開けられたような気がした。

「ぎゃッ」

落下、衝撃。

私は鞆を胸に抱えたまま大きな水溜りに叩きつけられた。

「我輩の袂へ来るか。良いだろう」

さつきと同じ男の声が、今度は頭に直接響いてくる。

けれど私にはそんなことどうでもよかった。思いがけず飲み込んだ塩水と重くなった制服が苦しくてつらくて、きつく目を閉じたあとどうすることもできずに溺れていた。

「我が名は海洋神ウルディノ。異界人よ、この地にて大いなる海にソラー  
護られよ。運命がその身を分かちまでデルマレーア」

護る？

だったら、あんたが助けに来てくれてもいいんじゃないの。偉そうに……。

\*

自分がどうやって助かったのかは知らない。

ひとつだけ分かっているのは、ラッキーなことに再び気を失って、その後どこかの陸に打ち上げられたみたいだということ。鞆も右手にちゃんと持っていた。けれど中身がどうなっているのかは簡単に想像がつく。何だか可笑しくなって私は弱々しく笑った。

もしかすると怪我をしているのかもしれない。体全体が痺れるように痛んで、そしてすごく眠かった。ここで寝たらやつぱり死んでしまっただろうか。ぼんやり考えていると、何か生き物の気配がこっちに近づいてくる音が聴こえ自然と体が強張った。

生き物はどうやら人間らしい。小石の踏み方が靴の音に似ていた。もしも私に気づいたのなら助けしてくれるんだろうか、それとも殺されるんだろうか。期待と不安がみるみる膨らんで、私は息をしていることさえ嫌になり目を閉じる。浅い眠りはすぐにやってきた。

耳に残るさざ波を子守唄に、一瞬のまばたきの向こうに映った人間を見てしまい私は心底後悔した。

殺される。

海坊主みたいな頭をした、このいかついおじさんに。

## 2・もうひとつの始まり（後書き）

### 【今回登場した単語】

- ・シルソーノ silsono：沈黙
- ・デオク deoccc：闇、暗闇

### 3・古代人・前編

Sai, Sscanta solar kulr Scar.  
(古代人・前編)

大小無数の島々から成る海洋同盟の本拠、デルバルゾ・マレーアは背後に小高い山を持つ斜面状の街である。海洋神を奉る神宮を頂上に戴き、各地区を束ねる君長の別邸や議場に市政所、裁判所などの官庁街があり、市民たちの生活の場があり、そして入り江から伸びた街道を辿ると小島全体が港と化したマレ・ポルトガ港に行き着く。

ここにはおびただしい物資と人とが集まり、散っていく。他の都市から入ってくるものの、逆に輸出されていくもの、単なる中継地点として立ち寄っただけのもの。双方の商人が落ち合ってそのまま取引を始める場面も少なくない。最大の交易拠点と呼ばれる所以である。

「坊ちゃん、ロイ坊ちゃん」

商船がそのマレ・ポルトガ港に帰着してすぐ、積荷の運び降ろしを指示していたロイスは、街道から聞き慣れた声が走り寄ってきたことに気づき斜め後ろを振り向いた。

「坊ちゃん」

「パコットおじさん」

小柄で恰幅の良い中年男は、棧橋で待つロイスの下までその名のとおり転がるように駆けてくるや否や、がっくり膝を崩して荒い呼

吸を繰り返す。心配した青年が分厚い肩に手をやって覗き込むと、男は心配の色を映す茶色い瞳へ息も切れ切れのまま笑いかけた。

「ぼ、坊ちゃん。よくぞご無事で」

「ありがとう、私は大丈夫だ。それよりもおじさんの方こそ一体どうしたんだ？ 屋敷へはこれから報せを入れるつもりだったのに」

「昨日、ロイ坊ちゃんからの手紙が、届きましたね。『早ければ明日辺りに着く』って、屋敷の皆はそれはもう大喜びで。いやあ、あたしも待ち遠しくて眠れませんでしたよ。しかし頭領は『迎えをやるのは実際に着いてからでも遅くない』と仰ってたんですけども、待つのが辛くて居ても立ってもいられず今日は朝から屋敷と港を百回も往復してしまいました。ほら、お陰で腰回りが幾分引き締まったと思いませんか？ まあ空戻りする度に頭領から睨まれてたんですけどね。頭領だって待ち切れないクセに、いい八つ当たりですよ全く」

自らが仕事中だろうと食事中だろうと、たとえ疲労困憊の最中であつても質問には必ず瑣末事をくつつけて返すという、彼の話好き程度では済まない性癖を前にして、ロイスは数ヶ月ぶりに故郷へ帰ったのだという実感が湧いた。もともと彼が商会入りした十数年前から何かと世話になっていたとはいえ、実感を湧かせてくれたのがよもやパコットだったことに力の抜けた笑みを隠せなかったのだが。

「今夜は本当に幸運な日だ。坊ちゃんたちがお帰りになるのと」<sup>「サ</sup>  
<sup>イエス</sup>

「『S』がいつぺんに来るなんて。船の上からはそれはもう神々しく見えたでしょう。当代神官のハンナ様に続いて二人目までもがこの街においでくださったのは、きっとウルディノ神の祝福が頭領や坊ちゃんに届いたからですよ、ええきつと」

「……そうかもしれないな。とにかく、おじさんが痩せ細る前に会えて良かった。積荷を運びたいんだが、馬車の用意は整っているか」

「ええ、ええ。もちろんです。いつ船が現れても良いように——おいお前ら、何をのんびりしてるんだ。早く来い！」

青年が何事かと背筋を伸ばすと、乱暴に手招きする頭巾の向こうに数頭の荷馬を見つけた。そのあとに続いて引き車を押す担ぎ手たちが外灯下に見て取れたが、何となく足取りがフラフラとおぼつかないでいる。……どうやら今し方パコットが言いかけた台詞を借りると、彼らもまた『いつ船が現れても良いように百往復させられた』のだろう。百一回目の徒労を防ぐことができたと安堵したものの、ロイスには父が手ぶらで戻る部下を睨む理由がよく分かった。

「はて、ところで坊ちゃん。副頭領の姿が見えないようですが」

あの者らに酒代でも振る舞ってやろうかと思案していると、辺りを眺めていた中年男がちょび髭に手を当てつつ呼び掛ける。

「ああ。マラノには別の仕事をやってもらっている。心配はいらない、直に戻るだろう」

そうですか、と特に訝る様子もなく応えるパコットの目元を青年は静かに見つめた。

——うまくやってくれただろうか。いや、うまくやらねば意味がない。信じていないわけではないが、自分の目で確かめたい。どうしても。

ロイスは一度逡巡し、踏み出しかけた足を戻したが棧橋の前に整列していく馬車を見届けるなり、小さく頷いて対峙する男の脇へ素早く躍り出た。数歩分の浮板が軋んだ水音を放つ。

「おじさん、すまないが私はマラノを連れて先に戻っている。あと

のことはおじさんに任せてもいいだろうか」

「へっ？ そりゃまあ、あたしゃ一向に構いませんけども、どうしてまた」

「理由は屋敷に着いてから話すよ。あと、船の連中への給金は後日商會がまとめて支払うことになっているから、もし訊かれたらそう答えておいてくれ。すまない、それじゃあ頼んだ」

「は、はい。何が何やら、よく分かりませんがとにかく頼まりました」

目配せを交わした後に再び歩を進めるロイスは、パコットの「おい、お前たち！」という甲高い大声を背にしても待機中の担ぎ手たちのように驚いて凝視することはしなかった。

「よく聴け、ここから先はこのパコット・ダミエがお前らの商長だ。棧橋を渡る時はどんなことがあるうと積荷を手放すなよ。だがお前らが海に落ちたら何よりも先に積荷を守れ。商品に傷ひとつつけちゃいかん。ロイス様の代理を務める、このパコット商長の指示をよく聴けよ」

まるで歌っているかのような調子の良い弁舌。さすがは担ぎ手時代からずっと商團の指示係を務めてきたベテランである。ここ数か月周りの者が『坊ちゃん』と呼ぶのを制してきたロイスだったが、彼の声でそう呼ばれると何故か邪険にはできず、自分に対して使うときのみという条件付きで渋々許していたのだった。

マラノが父親代わりならばパコットは気の好い親戚のおじさんというところだろうか。

青年は棧橋の袂で深々と礼をする担ぎ手たちへ右腕を軽く上げて挨拶を返し、「放すな放すなエンヤコラ」と今度こそ歌い始めたベテラン商長に口元を緩ませながら遠ざかった。

＊

港を出るとすぐ、砂州に沿って作られた長い石街道が目の前に広がる。砂地へ打ち寄せる白波を右手に、足元を点々と照らす明かりの傍らを歩いていた青年は、ふと六つ分離れた灯火の先に人の気配を感じるとともにかまびすしい話声を聞きつけた。

「まさかデルバルゾ・マレーアに二度目の『<sup>サイエス</sup>3・S』が来るなんて

……」

「いきなり神宮の御神鐘が鳴るからどうしたのかと思ったが、飛び起きて正解だったな」

「わたし初めて彗星を見たわ。本当に綺麗だった！　きっと今年の冬は大漁に恵まれるわね。そうに違いないわ」

もう真夜中を過ぎているというのに両脇の歩道には多くの人々が集まっていた。老若男女、ある者は寝間着姿のまま嬉々として囁き合う。その言葉を拾ってみれば、話題の中心は言うまでもなかった。ロイスは彼らへ一瞥を投げると少しだけ顎を引き、散歩にしてはや早い歩調で集団の横を通り過ぎて行った。声を掛けられたなら平然たる様子で応える用意は出来ていたがそれもなかった。界限では誰もが知るベッケンナー商会の団服を身に纏い、供も連れずに街へ向かう背中では明らかに不自然だったにも関わらず、幸いなことにそれと気づいた者は一人もいなかったのだ。

理由は言うまでもない。

「坊ちゃん」

地区の中でも下町と称される一帯。未だ見物人で溢れているだろう大通りを避けて垂直に走る路地を選び歩いていると、野太い声と

ともに民家の陰から坊主頭の男が堂々たる体軀を覗かせた。自らの団員服を被せて隠してはいるが、青年には彼が何を背負っているかすぐに感づいた。

「マラノ。うまくやったか」

ロイスは些か興奮したような目つきで尋ねる。ふたりは互いに待ち合わせ場所へと向かう途中であつたため、ここで鉢合わせしたのはまさに偶然の産物だつた。

「へえ、何とか。ウルド湾の岸壁に打ち上がつていやした。他にも興味本位の連中がいてヒヤヒヤもんだつたんですが、<sup>サイエス</sup>『3・s』のお陰で海の近くまで見に行つたでも思つたんでしょ。おれが戻つた頃にはすっかり引き揚げちまつて、このとおりうまいこと搔つ攫つて来れました」

「そうか……」

サイエス、と呟いた青年の瞳はマラノの肩から垣間見える膨らみを捉える。

いつから始まつたのかは定かではない。だが古代の人々は『S s c a n t a s o l a r r k u l r S c a r . 』<sup>サイエス</sup>（鐘の音が空に響く）ことを頭文字のエスを取つて『3・s』と呼んできた。そして天空に御神鐘が鳴り響くとき、現れたる虹の羽衣とともに決まつて地上のどこかに古代人<sup>ソーラー</sup>が落ちる。すると数年のうちに、奇妙にも各地で豊作に恵まれることもあるらしい。故に現在では<sup>サイエス</sup>『3・s』は神々による吉兆の報せとして広く知られていたのだつた。

「坊ちゃんの方はいかがですかい」

「だからその呼び方は……まあいい。今頃パコットおじさんが運び

手の先導をしているだろうさ。私たちも急ごう。人目につけば何かとまずい」

「へえ」

その後ふたりは無言のまま歩き続けた。この辺りには細い抜け道が多い。潮の香りが薄らぐにつれて小さな民家が軒を連ねるようになり、ロイスは器用にその間を通って石畳の坂を登っていく。夜目に慣れた今では月の明かりだけで十分だった。

しばらくして道が緩やかな坂の途中にある娼婦街へと差し掛かったとき、賑やかで甲高い声を聞きつけたマラノが背中の人間を大事そうに背負い直した。それを横目に感じ取ったロイスは脇道へ曲がろうとした足を止める。

「どうした」

「いや……。ふと、このお嬢ちゃんが花街の人買いに見つからなくて良かったなと思ひまして」

「人買い？ 女なのか」

今度の古代人<sup>ソーラー</sup>も。

意外そうに呟いた青年に対し、マラノは腰を屈めて団員服の中を覗き込ませた。どうやら眠っているようだ。襟元から見えるのは柔らかな黒髪と僅かな肌しかなかったが、全体的な線の細さから見て、男ではないのは確かだった。

確認後、すぐさま相手に今一度の移動を促す。遠くの喧騒を無視して大男は話を続けた。

「年の頃はうちの娘と二つ三つ違い……や、それより下かも知れねえ。とにかく見た目は東の大草原同盟に多いのっぺりした顔立ちでした。もしかしたら『古代ヤーハン人<sup>ヤーハナー</sup>』か『古代シャンヒー人<sup>シャンハイア</sup>』なんですかね、嬢ちゃんは」

「さあな。気になるならあとで本人に訊けばいい」

それにしても、彼女が打ち上げられていたというウルド湾は出船前の漁師や、それこそ人買いがこつそり商売するために夜中でもたむろしている場所だ。マラノほどの大男が、よく誰にも見つからず連れて来られたものだ。

疑問に思ったロイスが特に他意もなく尋ねると、見上げた先の坊主頭は返答に悩んだ様子で低く唸る。

「それが……」

このお嬢ちゃん、ウルディアーナの塔の近くに居ましてね。

思いもよらなかった言葉に青年は目を見開いた。

「おれは別段信心深いってわけでもねえんですがね。ほら、あの塔の別名は『ウルド湾の貴婦人』て言うじゃないですか。実は岸壁に降りてつたとき、海面がキラキラ映る土台のすぐ傍に倒れてるのを見たんです。もしかして貴婦人が守つててくれたのかと思つちまつて正直シヨンベンちびりそうでしたよ。海の男が情けねえ話ですけど」

ロイスは柄にもなく弱気な余韻を残す男の言葉を半分程度しか聴いてはいなかった。聞く素振りを見せながら、彼は考えていたのだ。――塔にまつわる別の謂れを、マラノは知らないのかもしれない。果たしてそれは事実だった。ロイスとてその謂れを知ったのは昔戯れに目を通してみた文献からだっただけだから。

ウルディアーナの塔は『ウルド湾に建てられた小さな灯台』という意味の他に、『海洋神ウルディノを奉る場所』という意味を持つ

らしい。ならば彼女がウルド湾に流されたことも、人買いの手に渡ることなくマラノによって助けられたのも納得がいく。彼女は海洋神によって守られていたのだ。

その彼女を自分は今頭領に引き渡そうとしている。いずれは当代神官の跡を継ぐかもしれない人間なのだ、恩を売っておけば後々商會全体に大きな利益が舞い込んでくるだろう。だが恐れ多くも神が守護した者を、利己的な欲望によって奪い去っても許されるのか。すなわち神への冒瀆となりはしないのだろうか。

（おれは別段信心深いってわけでもねえんですがね）

隣を往く男が漏らした一言を思い返す。ロイスもまた熱心に神宮へ通うほど信心深くはない。しかし自分たち商人や漁師、海を生活の中心とする同盟の者にとって、ウルディノ神は神々の中でも最も重要な存在だ。神を敬い神宮へ保護を求めるか、それとも身内の利益を優先し匿うか。一度決めたはずの青年の決意は掻き乱された。

（……どちらにしろもう後戻りは出来ない。やり方はいくらでもあるんだ、この際思うまま行こう）

神への畏れは彼の内から湧き出る情熱によって押し流されていく。ロイスは冷ややかな表情を変えることなく唾を飲み込み、ちらりと隣の肩口を盗み見た。男の歩みに合わせて黒髪が揺れている。哀れには思ったが、彼女に対して謝罪の気持ちはこれっぽっちも起こらなかった。

やがて地区の境を告げる大通りへと辿り着く。向こう側に渡れば彼らの領分、ベッケンナー商会本部があるレシタ区だ。月は無人の市場通りと脇に立ち並ぶオレンジ色の屋根を静かに照らしている。更に進んだ坂の中腹。広い土地を囲むレンガ塀の中に、目的の屋敷

はあつた。

ロイスは微塵もためらわず足を踏み出した。

### 3・古代人・前編（後書き）

長くなりそうだったのでふたつに分けました。固有名詞、その説明、伏線。作品を土台から築くにあたってこれらを話のどこにちりばめたら分かりやすいのか、難しいです。一次創作って奥が深いなあ。

#### 【今回登場した単語】

・サカンタ ソラル クール スカー Sscanta sola  
rr kullr scar. : （直訳すると「鐘が空に響いて  
いる」の意）古代人が現れる前触れとして神宮の鐘が鳴ることから  
古代人が来たことを意味する慣用句。略して3・s<sup>サイエス</sup>  
・ウルディアーナの塔 Urdiana Phalaros :  
昔デルバルゾ・マレーアの南東にあるウルド湾に建てられた要塞。  
目的は航海者の帰路の確認とウルド港の防衛。外観の優美さから  
『ウルド湾の貴婦人』 Nez Urd·belf と呼ばれる。

他の単語は今後の話の中に出てきたり要チェック単語だったりするので、今のところは割愛させていただきます。

#### 4・古代人・中編

quen, Sscanta solar kulr Scar.  
(古代人・中編)

ロイスとマラノが屋敷の門をくぐる頃には通りの騒ぎはほとんど収まっていた。彼らもよく知る、瀟洒な匂い漂う住宅街の空気が戻りつつあった。

「お帰りなさいませ、ロイス様」

寝静まった街中に両開きの鉄門が重く開かれる。懐かしい石畳を踏みしめると、近くにいた護衛兵や使用人が畏まって頭を垂れた。声を聞きつけ奥から駆けてきたのは使用人頭である老年男で、寝間着に上衣を引つ掛けた姿のまま二人の前に馳せ参ずる。

「長旅、お疲れ様でございました」

「ああ。道中色々あって、こんな時間になってしまった。父上と母上にご挨拶申し上げたいのだが、まだ起きておいでだろうか」

「はい。ご兩人ともロイス様のお帰りを今か今かとお待ちでございます。すぐにご帰着をお知らせし支度を整えますので、しばしお部屋にてお待ちください」

「分かった。この夜分だ、くれぐれも『ロイスが無理を言ってますまない』と伝えてくれ」

「かしこまりました。ロイス様もごゆるりとお寛ぎください。他の者にお着替えと軽い食事を運ばせましょう」

言われた青年は僅かにためらい、首を振って制した。

「いや、それは遠慮しておく。もうじきパコットが荷車を先導して戻って来るんだ。私は彼らの苦労のためにも、商長として蔵に運び入れるまでの仕事を成そうと思う」

「さようでございますか。それでは、どうぞご無理をなさらぬよう……」

男が一礼し来た道に戻っていくまで見届けていたロイスは、すぐさま注意深く周囲へと目をやった。そして左手の方から――あれは台所番の女中だろう、粗末な前掛けを身に着けた二人の女性が水瓶と果物かごをそれぞれ抱えて、向こうに立つ衛兵の前を通り過ぎようとしていた。

「その女たち。少し用がある、こちらへ来い」

突然頭領の子息に呼びつけられた娘らは肩を震わせた。小走りで見近づいてくる姿を横目に、青年は隣に立つ大男へ視線を投げる。

「マラーノ。古代人<sup>ソーラー</sup>を客室に寝かせてくれ」

「へえ、了解です。……坊ちゃん、これが終わったらちよいとウチの方へ寄ってもよろしいですかい？ 早く娘の顔が見たくて仕方ねえもんで」

「そうだな、そうするといい」

女中はお呼びでしょうかと恐る恐る答えた。ロイスは団服の懷から銀貨を取り出すと、二人の手に握らせる。

「お前たちに仕事を頼みたい。しかしこの仕事は私の一存であつて、もちろん誰にも口外してはならない。これから見るもの聞くもの一切、誰にもだ」

拒否の声が上がる前に早口で用件を話し始めた。

「その仕事が済んだあとで構わない。急ぎレシタ区の医師詰め所へ行って、当直の医者を連れて来て欲しい。それと……」

不意に言葉尻を切り、目の前の娘たちをまじまじと見つめた。水瓶を抱えた一人は彫りの深い顔立ちと豊かな赤毛を編み込んでおり、一目で生粋の海洋同盟人であることが分かった。もう一方は切れ長の瞳と薄い口唇が、どこことなく東寄りの雰囲気醸している。

「お前、出身はどこだ」

「はっはい。わたくしはカロクムという、大草原同盟南部にある稲処の出でございます」

「そうか。では、お前には別の仕事を頼もう」

ロイスは彼女に古代人<sup>ソーラー</sup>が目覚めるまでの世話を言いつけた。もちろん、事情を伏せて「東方出身者と思われる遭難者を保護した」<sup>ソーラー</sup>とだけ説明することも忘れない。

もし仮に古代人<sup>ソーラー</sup>が『古代シャンヒー人』<sup>シャンハイア</sup>や『古代ヤーハン人』<sup>ヤーハナー</sup>だとすれば、今後自分が接点を持つときに、まず同じような顔立ちをした大草原同盟の者を介していた方が何かとやりやすいだろうと思つてのことだった。

「分かったか」

強く念を押す。別に凄みを入れたわけではなかったのだが、二人の女中は怯んだように目を逸らして小さく返事をした。それを見たマラノはすかさず調子の良い声色を放ち、一歩前に進み出る。

「よし。そうと決まればサクサク動くぜ。赤毛の姉ちゃんよ、その重そうなヤツは厨房に持つてくんだろ？ おれに寄越しな、あんたはすぐに詰め所へ向かってくれ」

「で、ですが。マラノ様は背中に遭難された方を背負われていて……」

「このくらいのこと朝飯前よ。そらっ」

重心を右側へ傾けたかと思うと、大男は娘が両手で抱えていた水瓶を奪った。曲げた左腕の隙間にすっぽりと収める。

「早く台所に案内してくれ」とばかりの視線を向けられた東方系の娘は、慌ててスカートの裾を掴み足早に歩いていく。赤毛の娘も会釈を残して鉄門の横にある通用口の方へ走り去った。

一人石畳に残ったロイスの頬に、涼やかな晩秋の風がなびいている。そうして数分と待たないうちにパコット・ダミエの朗々と響く歌声が近づいてきた。

\*

「ロイス！ 長い船旅、ご苦労様でした。母はきつと無事に帰って来ると信じておりましたよ」

「母上……ご心配をお掛けしました。父上も、お元気そうで何よりです」

「うむ。ロイスよ、お前も商長として初めて赴く商談を経て、心身ともに成長したようだな。父として誇りに思う」

通された応接間は仄かに温かった。暖炉にくべてある薪が黒く燻っていることから、この部屋に長い間人の出入りがあったのだろう。決して要人の接待だけではない。一体長いこと誰が留まっていたのかは父と母の様子を見ればすぐ分かった。まだ二人とも平服

を着込んでいたからだ。

暖炉の傍ら、テーブルを挟んでソファに座る母、クレア・ベッケンナーは終始にこやかだった。旅の出来事を尋ねては、息子に瓜二つの茶色い瞳を細めてコロコロと笑う。口下手な息子が訥々と語る話に熱心になって聞き入り、深く相槌を打ち、穏やかな仕草で続きを促す母の佇まいはロイスにとってひどく心地好いものでもあった。その心地好い空気が乾いた拍手によって中断される。両手を持ち上げたままの父、デイビスが二人を交互に見比べた。

「今宵はこの辺りまでにしておこう。喜びを分かち合い土産話も尽きぬようだがもう夜も更けた。クレアや、お前は先に休んでいなさい。続きは明日の酒宴でじっくり聴くこととしようではないか」  
「そうですか……。残念ですが、仕方ないですわね」

立ち上がった妻の手の甲に慈しみの口付けを施し、デイビスはソファに凭れたまま言葉を続ける。

「僅かばかりの規模だが、明日は全会員に通知して宴を開き、商団と船員たちの苦勞を労おうと思う。ロイス、お前には皆に向かって簡単な演説をしてもらうつもりでいるから、心得ておきなさい」  
「分かりました」

クレアが侍女を伴って静かに部屋を出て行った。それを確かめるように見ていた父が、ようやく重い腰を上げた。

「さて」

豊かな顎髭をさすりながら息子を見下ろす。しかしその瞳にあった、父親が子に向ける愛情のようなものはすっかり消え去っていた。

「これから仕事の話だ。執務室へ行こう」

ロイスがソファから立つか立たないかのところで、「マラノはいるか」と応接間の外へ声が掛かる。反応はすぐ返ってきた。

「へえ、ここに」

「今すぐ此度の商いの遠行日誌と取引目録を持って来い」

坊主頭の大男が一礼して顔を覗かせると、頭領はこの先の人払いを命じるとともに彼の同席を促した。三人の靴音が応接間を離れ、廊下を辿り、突き当りにある豪華な扉へと続いていく。ロイスは室内灯の照らす薄明るい廊下で、斜め前を歩く父のうなじをぼんやりと盗み見た。

父は見た目こそいかにも厳格堅物といった体だが、周りの評判では朗らかでいて気風も羽振りも良いという。だが価値なし、儲けなしと見なしたものについては銅貨一枚すら融資しない。この部分だけを見れば、利益を優先する商人らしいもつともな性質なのだろうが、ロイスには彼が何のどこを見て金を出すのか、出さないのかがいまいちよく分からないでいた。分からないことを平然と行っている父の姿が、子どもの頃から恐ろしかった。

一度は援助を断った相手方へ、後日たくさんの詫びの品々を持って謝りに出向いたことがある。かと思えば釣りや賭け事に興じていた最中に「閃いた」と叫び、未踏の交易経路を開拓したこともあった。

かつて祖父が礎を築き根を張らせたベッケナー商会は、この父が花咲かせたと言ってもいい。ロイスにしてみれば奇行とも取れる数々の行いが、商会を海洋同盟指折りの大組織に仕立て上げたのだ。

いずれは自分が継がねばならない商会。それを思うと、ちょうど辿り着いた部屋に漂う重厚な緊張感のように、彼の胸中がこれでもかと締めつけられた。その理由の大部分は卓上で目録に目を通す父なのだというのを、果たして本人はどこまで気づいているだろうか。

いや。偉大すぎる父には下らない悩みなのかもしれない。

四方の壁を囲む本棚の側に佇み、ロイスは自嘲気味に口元を歪ませた。

## 5・古代人・後編

dos, Sscanta solar kulr Scar.  
(古代人・後編)

人払いに出ていたマラノが扉のノックとともに入室するなり、沈黙の執務室にまずデビスの第一声が発せられた。

「初めてにしてはよく出来ている。それに売り値と買い値の均衡もなかなか良い」

「ありがとうございます」

「しかしこの石炭の売値だが、言い値がちと高くはないか？ よく相手方が付け値を下げずに応じたな」

「それは——」

言われてふと思い出した。帰途の船上で、自称世話役が冗談のように笑っていた言葉。

「頭領。それは坊ちゃんの交渉の賜物ですぜ」

野太い声が後ろから掛かった。先程までとはいかないがやや芝居がかった説明を受けたデビスは、肩を揺らして笑う。

「フッフツ。そうかそうか。親子とはよく言ったものよ。わしの若い頃を思い出すわ」

「自分もです。頭領も相当無茶をなさいましたからな」

「お互いにな。……ところでロイスよ」

取引先の地方で変わったことはあったかと問われ、青年は迷わずこう答えた。

「塩の値が高騰してありました」

「塩とな」

「はい」

その一帯では主に北部山岳同盟で採れる岩塩を輸入している。しかし先年、件の地で落盤事故が起こったため入手が難しくなっているという。

「経路の復旧期間を調べさせましたが、あと数年ほどかかるのとことです。塩は生活に欠かせません。このまま高騰が続けば深刻な塩不足となり、いずれは暴動に発展するでしょう。我々海洋同盟が使う天日塩や海水塩を持ち込んで、交易の拡大を図る良い機会だと私は思います」

「ふむ……。それも一理ある。分かった、次の商長会議にかけられるよう、わしの方でも調べてみよう」

不意にデイビスが椅子から立ち上がり、執務机の脇を抜けてロイスの方へと歩み寄った。父の影を感じた息子は一步後ずさって会釈をする。

「遠行日誌も見せてもらった。お前は商長の職務を立派に務めていたようだ。私的な金策をせず節制に努め、運び手や護衛からの評判も良い。最大限の利益を求めるといふ商人の心も持ち合わせている。親心でなく純粹に、このまま正式に商長へ任命しても十分なほどだ。だが――」

冷やかな空気が流れた。畏まっていた青年がサツと顔を上げると、険しいような悲しいような顔をした父親が立っていた。

「お前はまだ目先の利益しか見えていないようだ。真の商人とは、ただ利益を求めて動くだけではいけないのだよ」

船長の声を無視して靄の中を突っ切らせたそうじゃないか。

怒るでもなく叱るでもない、ただ平坦とした咎めが若者の耳にわんわんと響いた。

「理由を訊こう」

どう答えよう。何と答えれば納得してくれるのか。今の彼に、再び父の瞳を覗く気力はない。

「……………靄が深くなってきたときには、船は大海のただ中におりました。数日かけて引き返し、積荷の鮮度を落とすよりも効率的だと判断したからです。それに予定通りの航路を進んでいれば、近くに灯台が見えるはずでした。ニンナヴェル灯台とマレ・ポルトガは目と鼻の先、そこに船がいたのです。ゆえに進むべきだと」

「なるほどな。だが、わたしにはどうも頂けん」

ハツとして視線を持ち上げた息子を待っていたかのようにデイビスは続ける。

「まず、そもそもの間違いを正そう。船上においては船長の意見を覆してはならん。今回はたまたま無事に済んだが、いくら何度となく海を渡ろうとも、商人は船の専門家ではない。天候、風向き、海流、それらを誰よりもよく知るのは船乗りだ。一介の商人風情が出しゃばってはならんということを終生肝に銘じておけ」

決して広くはない執務室に一人の男の声だけが響いている。

「良いかロイス。常に大局を見て物事を考えなさい」

確かに積荷は大事だ。だが決断を下したとき、取引で得た利益を上回る損失が出る可能性を考えたか、と問いかけた。問われた若者は答えなかった。

損失とはすなわち強行中の船に危機が訪れる可能性。座礁し、転覆し、積荷を失う。それどころか人命までも泡に消えかねない。そうなったときの、いやそうなる可能性が大きかったのだということ。そして商会全体が被るかもしれぬ大打撃を考えたのか、と頭領はにじり問うた。

やはり答えはない。

デビスは一度視線を宙へやって長いため息を吐くと、静かに、諭すように言った。

「もしわしがそこに居たなら、船長に同意した上で、どこか近くの集落を見つけ次第そこで霧が晴れるのを待つてはどうかと伺いを立てただろう。しかし、こんなこと今となってはどうでも良い。ロイス、わしが言いたいのはな。商長として、商人として、人間として相手と付き合っていくのに一番ものを言うのは、『信頼』なのだよ。どんなに儲けようが、どんなに落ちぶれようが、真に培ってきた信頼だけは決して裏切らない。だがそれを勝ち得るには途方もない時間と労力が必要だ。分かるか。絶え間なく対話を重ね、礼を尽くして、少しずつお互いの利害を探っていくのだよ。お前は自らの考え一つで、相手と信頼関係を築ける絶好の機会を逃したのだと思わねばならん」

物心ついたときから商会が当たり前のように側にあったロイスは、

特に意識して行動を起こさずとも彼らとの間に信頼関係ができあがっていた。

一方船乗りたちはどうだろう。皆、普段は航行組合に属し、今回たまたまベッケンナー商會が声を掛けて雇われた者ばかりだ。ロイスには彼らとの絆はないに等しい。ゆえに互いの一挙手一投足が先入観なく評価され、結果的に商會の評判にも影響しかねない。組織で成り立つ以上、一人が起こした行動すら軽視できないのだ。

ロイスは長い苦心の末に出した答えを否定されたことにショックを隠し切れなかった。同時に、打算で動くべきだと信じていた商人が、確率論やそれ以前に人の感情の機微にさえ聴くなければならぬいとする父の言葉に納得がいかなかった。

腹心を使ってまで自分を監視していた父。商売とは何ぞや、という大前提の考え方が真つ向から対立しているように思え、激情に任せて反発したい気持ちも確かにあった。しかし、何故か彼の言葉が自分にとってひどく重大な指摘となっているような気がして、腹の底とは裏腹に頭は冴え冴えとしていた。

「……ふう。すまんすまん、つい説教臭くなってしまった。やはり寄る年波には勝てんな」

ゆっくり肩を回し、デイビスは疲れた笑みを見せると再び執務机に着いた。

「ロイスや。お前にはこれから酷な思いをさせてしまうだろう。だがお前は商會を継ぐ人間だ。それゆえ他の者よりもしつこく言わせてもらった。無論、わしの評価も厳しい」

商長の任をいったん降ろそう——頭領の口元がそう告げ終わる前に、押し被せるようにして「お待ちくだせえ」と声が掛かった。扉

の前に立ち、今までずっと空気のように気配を押し殺していたマラノだった。

大きな一步を踏んだ途端、風を切り裂くほど豪快に腰を曲げ、深く頭を下げる大男の姿に父子は釘づけとなる。

「場をわきまえず進言しましたことを、まずお詫びいたしやす。頭領、このマラノたつての願いです。どうか坊ちゃんに、今一度の機会をお与えください。坊ちゃんは……申し訳ねえ坊ちゃん、喋っちゃいます。坊ちゃんは決断を下したあととずっと悩んでおりやした。理由は他でもねえ、自分が無理言つて決めた以上は全部の不安も責任も自分で落とし前をつけにやらんつてことを、ちゃあんと分かっているからです。頭領、こうは思えませんかね。坊ちゃんは商団の連中のみならず、船乗りの安全を考えていたからこそ答えを急いじまったつて。いくら頭領のご長子とはいえ、生まれて初めて商長を任せたモンがいきなり窮地に遭つたとき、そうと教わつたわけでもなしに『全部の責任を負う』なんて覚悟を決めるのは並大抵のことじゃありません。あのおれはいらぬ口返答を叩いちまいましたが、はつきり思ひやした。坊ちゃんは……いや、そこにいらつしやるロイス様は、商長となるべき資格をお持ちでらっしゃいます。頭領、ここは一つ、坊ちゃんを商長に据えてもう一度旅に赴いてもらつてはどうでしょう。正式な商長として任命なさるかどうかは、そのときの坊ちゃんを見てからでも遅くはないでしょう」

すさまじい熱のこもつた長口上であつた。

本棚を背に佇んでいた青年はそつばを向いたまま居心地悪そうに咳払いをし、机上にて腕組みをしていた髭面の男は、にやにやと笑みを湛えている。そうして無言の笑みがいよいよ愉快そうに体を弾ませた頃になつて、ひとしきり笑い終えた男が掠れた声を放つた。

「ああ、意外や意外。お前がそこまで言うとは思わなかつた。そう

だ、ちょうどよく今宵は十八年振りの「サイエス 3」<sup>サイエス</sup>があつた。ロイス、こうしてお前たちが無事帰つて来れたのは、偉大なる神々もたらした奇跡の賜物かもしれんな。いいだろう。今回のことは神の奇跡とマラーノの熱意に免じよう」

後日また、お前を商長として送り出すとしようか。

\*

穏やかにそう言つた父の顔が脳裏に焼きついている。後ろ手に扉を閉めたロイスは長いため息を吐くと、室内灯に照らされた坊主頭を睨みつけた。

「——どういふことだ、マラーノ」

問われた男は強面にしてはつぶらな瞳をきよとんと丸くさせる。

「はて。何のことですかい」

あくまでとぼける気らしい。だが今更真実がどうであつたかなどと問い詰めたところで、この調子者は決して白状しないだろう。それよりもこれからだ。胸に渦巻いていた疑念を無理やり脇へ追いやつて、若者は生き生きとした茶色の瞳を相手へ向けた。

「いや、何でもない。それにしても助かつた。お前があそこに居てくれないければ、私は今以上の好機を掴めなかつたに違いない」

「やめてくだせえ。おれは坊ちゃん世話役として当然のことをしたまですよ。それに、頭領はああ言つてますが、本当は坊ちゃんがお戻りになつたことを心から喜んでらっしゃるんですぜ。これだけはお忘れにならねえでくだせえ」

「……………ああ。そうだな」

確かにそうかもしれない、とロイスは思った。時折何を考えているのかさっぱり分からない父だが、自分をきちんと考えてくれていることだけは分かる。

やむを得ない空気だったとは言え、そんな父に一つ隠し事をしてしまったことをふと思い返した。

「結局言えずじまいだったな」

廊下をゆっくり歩きながら無意識のうちに漏らす。何を言えないでいたのかすぐに気づいたマラノは、大きな図体を丸めてぼそぼそと呟いた。

「これから一体、どうするおつもりで？」

「うん……」

本当ならば『最大限の利益を求めて』動くつもりだったものが、出鼻を挫かれてしまった。だがロイスの落胆は比較的軽いものだった。むしろ、先ほど頭領から受けた数々の教えをもとに、自分が次に何をすべきかを考えてみると、漠然とながら輪郭のようなものが浮かんできたような気がしたのだ。

信じてみるか。神々の奇跡とやらを。

「なあマラノ。実は——」

意を決して口を開いたそのとき、廊下の向こうから慌ただしい靴音が響いた。

一心不乱に駆けてくる東方系の娘は、今にも叫びだしそうな悲痛

の表情を貼りつけている。その形相を見た瞬間、青年の心にひやりとした緊張が走った。

「ロ、ロイス様。お目覚めになりました！」

## 6・出会い・前編

l e a , W h y u r e e t u s i ? ( 出 会 い ・ 前 編 )

ほしかげさやかな夜のうみ  
ゆらゆらただよう月のふね

——なんていう歌があつたのをふと思い出した。あれは確か、小学校に入学したばかりの頃だ。

毎週火曜日だけは友達の誘いも断つて、全速力で家へ帰った。夕方  
方の教育番組。五分間だけ流れる歌の数々が、まだ小さかった私を  
たまらなく夢中にさせた。クラシックの有名曲や外国の民謡、日本  
に昔から伝わるどこか懐かしい子守唄。生まれて初めて触れるそれ  
らを教えてくれたのはあの番組だった。

あの子をさがして とおくの空へ  
さかなの尾ひれは ほうきぼし

居間に差し込む夕陽とどこか物悲しい映像は、今でもはつきり憶  
えている。

私はまるであの歌をそのまま体験しているかのような、うつとり  
した夢心地だった。フカフカのシーツ、フカフカの布団。それでい  
て肌触り抜群の寝間着に素肌が気持ちいい。横向きから更にギュッ  
と体を縮めると、羽枕からはラベンダーみたいな香草の匂いがする。  
寝入っているとも、覚醒しているともつかないこのまどろんだ状態

が幸せなのだ。

けれどももう時間だろう。今日が平日か休日だったかはちょっと思  
い出せないけれど、とにかく起床に合わせてセットしていた携帯が  
そろそろ鳴る頃だ。起きようか、ううんでもまだ本当は眠っていた  
い。何度か寝返りを繰り返してはうんうんと無意味に唸ってみる。

……いくら待っても携帯のアラームは鳴らなかった。おかしいな、  
昨夜忘れていたのかもしれない。それとも、今日は学校も部活も休  
みなんだろうか。

……あれ？　ちょっと待て。確かうちの布団は、お母さんが  
「そのうち干すからね」とごまかし続けてきたせんべい布団のはず  
だ。こんなにフカフカなわけがない。それに寝間着だって上下のパ  
ジャマを愛用していたし、何よりノーブラってどういうことだ。私  
は寝るとき着ける派だ。

ここは、どこだ！

勢いに任せて両目をカッと見開いた。

まず視界に大きく飛び込んできたのが自分の手だったことに内心  
がっかりした。気を取り直し、手をどけて辺りを見回すと、派手な  
柄の絨毯にすみれ色のベッドが置かれていて、私はそこに寝転がっ  
ていた。

今私は知らない部屋にいる。ここまでは分かった。次はどうして  
私が知らない部屋にいるのかだ。ごそごそと掛け布団から這い出る  
と、不意にドアが開く音と同時に誰かが息を呑む気配を感じた。

見ると、日本人のハーフかクォーターっぽい顔立ちの女の子が、  
水差しを乗せたお盆を持って扉口に突っ立っている。どうして私を  
見てそんなに驚いているのかよく分からないし、ドラマに出てくる  
ような家政婦さんの格好をしているのも不思議だったけど、同じ日

本人がいてくれて良かった。この子に訊いてみよう。

「ねえ——」

「Mea!」

は？ めあ？

『めあ』って何だろうと考える暇もなく、女の子は熱っぽい瞳を輝かせて、明らかに英語ではない言葉を放ちながら近づいてくる。怖い。わけが分からないのがすごく怖い。私は上半身だけ起こしていた状態から素早く足を引き抜いて、ベッドの上に正座したままその子へ向かって両手をつ突っ張った。

「ちょ、ちよつと待って！ あつ、ホントに待って。痛い！」

腕に力を込めた途端痛みが走る。着せられていたワンピースの袖から白い包帯が覗いていた。そうだ、はつきり思い出した。私は生徒玄関から真つ逆さまに海へ落ちたんだった。

「とりあえず、待ってください。あなたは、どこの国の人ですか？ ここはどこなんですか？」

ってこれ現地語で言えなきゃ全然意味ないじゃん。にしても何語なんだそれは。

「どうしよう。英語でも何とか通じないかなあ。あのう、私は、日本人です。あなたは？ アイムジャパニーズ。マンガ、サムライ、分かる？ スーシー、テンプラ、テツカドン！」

女の子はお盆を持ったままポカンと佇んでいた。やっぱり英語も

通じないらしい。途方に暮れる私をよそに、彼女はブツブツ呟いて慌ただしく部屋を出て行ってしまった。

取り残された部屋に沈黙が漂う。疑問は深まる一方だった。

一体私の身に何が起きたんだろう。ここはどこで、そして私の制服と鞆はどこに。

……考えていても仕方ない。私はベッドを降りて再び部屋の観察を始めた。

ベッドの他にあるのは何か豪華そうな鏡台、何か上品そうなクローゼット、何か値打ちがありそうな書見机に何か華やかそうなテールセット。天井にはどう見ても高そうなシャンデリアが赤々と光っている。一言で表せばホテルのロイヤルスイートみたいな感じだ。

カーテンが引かれた窓辺はあるのに、天井の光と壁隅のランプがなければ、部屋はたちまち真っ暗になってしまう。もしかして今は夜中なんじゃないだろうか。そういえばどこかの岸に打ち上げられていたときも空が暗かったから、時間はそんなに経っていないのかもしれない。

絨毯の短い毛並みを裸足で踏み歩き、カーテンをそつと開けてみる。すると案の定、窓の外に広がる闇に溶けて、眉間にしわを寄せる不機嫌そうな私がぼんやり映っていた。

現実。この二文字が胸に重く押し掛かった。

そう、新学期を迎えていつも通りの部活をこなしたのも、いきなり落っこちたのも。落ちたついでに変な映像を見せられたのも、怪我したけど運良く助かってここにいるのも、間違はなく現実なのだ。しつこいけれどこれが事実なんだし、いくら納得できなくてもそう思い込むしかない。アニメや漫画なんかでよくあるシーンが頭に浮

かんだ。何て言ったらいいのかよく分からないけど、私はいわゆる

そのとき壁の向こうから何人かの靴音が聴こえた。だんだん部屋に近づいていることを悟った私は、慌ててベッドによじ登る。体勢をくると変えてシーツを引き寄せ、枕を背もたれに落ち着いた頃、扉のノックとともに彼らは入室してきた。

最初に現れたのは若い男の人。私よりも少し年上に見える。まるでテレビの世界を飛び出したような、とびきり格好いい外国人俳優以上の顔立ちなのに、残念なことにキツネみたいなつり目と絶対零度の無表情が好感度をマイナス百ポイントくらい押し下げていた。

そのキツネ目に入りしなから思いきり睨まれた私は、背筋を凍らせて視線を横へ逸らす。けれど逸らした先にいた黒い大きな人影と目が合った途端ワツと叫んでしまった。

「海坊主のおじさん！」

忘れてくても忘れられないその佇まい。浅黒い肌と筋肉とスキンヘッドが見るからに恐ろしい、全長二メートル級の格闘家が立っていたのだ。

私の恐怖の叫びと表情を目の当たりにした二人は、最後に扉を閉めたアジア系の女の子と何やら会話を始めた。やっぱり、何を喋っているのかまったく分からない。分からないのが余計不気味だった。やがて女の子は退室し、二人と私が気まずい空気の中残される。

私にとって彼らの第一印象は最悪だ。その上格闘家さんは、海辺で伸びていた私をここへ連れてきた張本人だと思っし、雰囲気からしてそれを指示したのはキツネ目くんなんだろう。大の男が寄ってたかって、いたいけな女子高生をどうしようってんだ。

太腿に置いた両手を強く握りしめ、ベッドの上で縮こまる。極力二人を見ないように顔を強張らせていると、おもむろにキツネ目くんがこちらへ歩み寄ってきてベッドサイドにどっかり腰を下ろした。うわあ、偉そうな態度。

「M e a . W h a y n a n a s t u s i ?」

「え？」

はい、また『めあ』来ました。だから『めあ』って何なんだってば。しかも言葉尻から察するに、この人は今私に何かを訊ねているような気がする。

どんなにものを訊かれようと、言葉が通じないのだから答えることはできない。戸惑う私にキツネ目くんは眉をひそめて小さく息を吐いた。彼も困っているらしい。床を見つめたまま顎に手をやって考える姿は、すごく様になっているのに。もったいないなあなどとぼんやり盗み見していると再びつり目を向けてきたので肩をビクつかせた。

「M a n a n a s e e L o i s .」

「……」

「L o i s . L o i s V e c k e n n a r .」

ひどく真剣な口調で、自分の胸元を指差しながら同じ単語を繰り返している。そうか。『ろいす』は人の名前だ。『ななす』とは名前のことで、彼は自分をロイスだと名乗っているんだ。

次にロイスは部屋の隅にいる格闘家さんを示して、「M a r a n o」と私に言い聞かせた。名指しされた格闘家さんはニイツと白い歯全開でくしゃくしゃに微笑んでみせる。うんうん、あの人は『ま

らーの』さんね。意外とノリの良い人なのかもしれないな。

「Tu si?」

右手の指が私へ戻ってくる。今度は大丈夫、言葉は通じなくても言いたいことはきちんと伝わった。

「私は、ミッルです。ミッル・イマイ」

「Mitturr」

「はい。そうです」

深く頷いたら体中に妙な安心感が湧いた。くすぐったさを覚えてはにかむと、それを見たロイスの表情も少しだけ柔らかくなったような気がした。何だ、ちゃんと人間らしい顔もできるんじゃないか。ますます格好良くなったことで急に照れ臭くなった私は、身じろいでそっぽを向いた。

その瞬間、辺りに豪快なお腹の鳴る音が響く。今度こそ恥ずかしさに打ち震えた。安心するとお腹が減るといのは本当らしい。

\*

二人分の押し殺した笑い声が落ち着く頃合いを計ったように、ロイスは笑みを噛みしめたまま早口で私に何か言い、次にマラーノさんへ指示を出した。頷きを返して部屋を後にするマラーノさんを見ると、うなじで束ねた長い金髪を揺らしてロイスが立ち上がる。別に出て行くわけでもなく、私と距離を取るかのようにテーブルへ着いたその意図が、いまいちよく理解できなかった。

十五分くらいだろうか。退屈していたところへマラーノさんが再

びやってきた。続いてさっきの女の子が、おいしそうな匂いのするカートを引きずって中央のテーブルに歩いてくる。車を脇につけた彼女は、私に近寄りニコニコ笑いながら背中へ腕を回した。ベッドを降りろ、ということらしい。

みんなきちんとした服を着ているのに、私だけ寝間着姿なのがなあ……とためらっていると、女の子はそれに気づいたのかクローゼットから大判ストールを出してくれた。これを肩に掛けて胸元へ垂らせばとりあえずは安心、かな。

彼女に連れられてようやく椅子に座る。そんな私の前に据えられたのはごはんだった。焼き目の香ばしそうな小さいパンが二切れと白身魚のソテー、それから湯気立つ黄金色のスープ。

——やばい。あまりに香りが良すぎてマジでやばい。そうだよ、私は部活が終わったばかりでクタクタのペコペコだったんだよ。この魚はバターソテーなのかな、なめらかに光る表面がものすごくおいしそう。こっちのスープはどんな味がするんだろう。ああ、食べたい。今すぐ食べたい。

「E e z e s m a g A / s i ?」

喉を鳴らすも、遠慮と気恥ずかしさで箸をつけない私に真正面のキツネ目くんが訝るように質問してきた。私と食事をちらちら見ているから、「食べないのか？」と言っているようだ。食べたいよ。食べたいけども。

「どうしよう……」

正直、こんなに良くしてもらっていいんだろうかと思う。グダグダの自己紹介でそれなりに打ち解けたのかもしれないけど、相手は見ず知らずに加えて言葉の壁も山の如しな人たちなのだ。怪我の治

療してもらい、ホテルのスイート部屋で休ませてもらったことはありがたい。私は彼らに助けてもらったのかもしれない。でも、お腹が空いたからさあ食事をどうぞ、なんてどっかの絵本のお姫さまみたいな展開では、言葉が通じない分「どういう魂胆があるの」と身構えてしまうのはある意味仕方ないんじゃないだろうか。

そんな私を見かねたのか、ロイスは短いため息を吐いてマラーノさんと女の子へ交互に視線を送る。二人が彼の側へ集まり、口々にささやくのを黙って見ていると、ロイスはまたしても女の子へ何か命令していた。さっきの偉そうな態度といい、勝手知ったるこの部屋といい、実はどこぞのお坊ちゃんとか。

彼女は意外と早く戻ってきた。物音に気づいたマラーノさんが扉を開けると、四角いお盆を持った女の子がテーブルまでやってきて、無言のキツネ目くんへコトンと差し出す。パンと魚とスープ。私の前に置かれているものと全く同じだ。

どういうことだろう？ 目を見開いて凝視する私をよそに、ロイス以外の二人が簡単な挨拶を彼に交わした（ように感じた）。一人は丁寧なお辞儀をして、もう一人は片手を上げて朗らかに。まるで「どうぞごゆっくり！」とでも言っているかのように、マラーノさんが彼の肩を軽く叩いた最後、彼らはあっさりと部屋を後にしてしまう。

ねえちよつと。

「置いてかないで」

咄嗟の嘆きにしろ、もちろん日本語なんか理解してもらえないわけがない。無情の音が湧き始めていた安心感を見事に砕いた。

寂しい。心細い。もう一度戻って来てはくれないだろうか。空きつ腹を押さえて扉を見つめ続ける私の側で、軽やかな金属音がすると思い顔を向ければ、キツネ目くんが何食わぬ様子でソテーを口に運ぶところと出くわした。

ちよつと……一人で先に食べちゃうなんてひどいんじゃないの。まさか私のために運ばせた料理が思いのほかおいしそうだったから、自分も食べたくなってとかそういうんじゃないでしょうね。しかしいいなあ、おいしそうだなあ。でもどんなタイミングで手をつけたらいいか分からなくなっちゃったんだよな。

悶々と考えながら目の前の食事を眺めていると、ふとフォークの動きが止まった。猫背になっていた姿勢を直し、頭を持ち上げる。静かな部屋に甲高いお腹の音が一つ。改めて向かい合った相手は念を押すように低く言った。

「M a g A /」

疑問形ですらない。

「……はい。いただきます」

あれこれ考えてないで早く食べる。私にはそう聞こえた。

## 7・出会い・後編

t y o , W h y u r e e t u s i ? ( 出 会 い ・ 後 編 )

失礼します、の意味を込めて軽くお辞儀をし、スプーンを右手に構える。手始めにスープからいただくことにした。シャンデリアの明かりで金色に映える表面をすくうと、波打つようにささやかな具が流れ込んでくる。玉ねぎのみじん切りだろうか。お腹の減りも極限ということもあってか、鼻を通る匂いは抜群。さて、お味の方は？

一口すすった瞬間、しょうゆに似たものすごく馴染み深い味が喉を通り、頭の中が一気に混乱した。明らかにヨーロッパ的な文化丸出しの雰囲気なのに、どうしてしょうゆが。大豆でも作ってるのか——いや違う。これはただのしょうゆじゃない。少なくとも私が普段慣れ親しんでいたものよりも少しすっぱい味がする。しかも口の中で転がすほど、コンソメみたいな澄んだ味が広がっていく。どちらかというところ『しょうゆ風味のコンソメスープ』に近いのだ。…ああ困ったな、何て言えばいいんだろう。つまりこれは前菜的なスープじゃなく、この中にパスタとかうどんとか他のものを入れたらもっとおいしいぞ、的な。とにかくスープだけじゃ物足りない。何か他の………そうか、だからパンがあるんだ。

私は間髪入れず二口目を含んだ次に、パンをちぎって放り込んだ。砕かれた焼き目がサクツと耳を刺激する。思ったとおり、小麦のもっちりした甘さとスープの塩辛さがベストマッチだった。おいしい。すごくおいしい。私はしばらくの間無言でスプーンを上げ下げし、

白身を切り分けて頬張った。

「うん——」

無意識のうちに声が漏れる。俯き加減の視界の端で、前方の彼が注意を向けてきたような気がしたが、どうせ分からないだろうと思つてそのまま独り言を呟いた。

「おいしいなあ」

「当たり前だ。賄い程度の食事だが、これもうちの料理長が仕込んだ味付けや火加減だからな。腹が減っているのにどうしてさっさと食べないんだ」

見てのとおり毒なんて入っていないぞ、と愛想もなく言うその口調にカチンときてしまい、俯いたまま応える。

「そんなこと思っていないですよ。あれはちょっと、謙遜が卑屈になっちゃっただけで……ていうかこれ賄いなんですか？　へえ、賄いつてこんなにおいしいんですね」

お母さんが時々テレビ番組のレシピを真似して作る『適当シリーズ』の何百倍もおいしい。まあ味付けも火加減も目分量だから比べること自体失礼なんだけど。ポロツと口に出すなり、キツネ目くんは「細かい部分はよく聞き取れないが、お前の母親はどうやら料理長に弟子入りした方がよさそうだな」と冗談っぽく言った。

ですよねー、なんて相槌を打ちながら最後の一口だったソテーを飲み込む。そのすぐあとに、突然黙りこくった目の前の彼が「おい、お前」と偉そうに呼びつけるもんだから、私は少々機嫌を損ねつつ顔を上げてやった。

「何でしょうか。……ん？ あれ？」

鋭いつり目が今は驚き一杯に見開かれている。そうだ。何だろう、この違和感は。私も釣られるように彼を見据えた。

時間が流れる。食事は二人ともとづくに終わっていた。静まり返る部屋の中、自分の鼓動がどんどん早まっていくのを感じる。目の焦点が合わない。相手の茶色の瞳もまた揺らいでいる。きつと向こうだって、違和感の正体に気づいたからこそ固まったままにいるのだ。

「あのう」

彼が言わないのなら仕方ない。

「もしかしくなくても、言葉、通じてますよね」

「……そうみたいだな」

私たちは信じられないものを見るかのように、口元を引き結んで手元のお皿を注視した。あの絶望的な戸惑いから何か変化があったといえば、この食事しか思い当たるふしがない。

「料理長さんが、特別なおまじないでも掛けてくれたんですかね」

痛々しい空気に耐えられなくなって、つい柄にもない冗談を口走ってしまう。私の乾いた笑いに対してロイスは肯定するでも否定するわけでもなく、ただ苛立たしげに目を閉じた。乱暴に頭を掻きむしるお陰でせつかくのきれいな金髪がボサボサと結び目から飛び出る。

なんて非現実的な。

そう低く唸る彼の言葉に、私も同意せざるを得なかった。

\*

ロイスは、今まさに私がいるお屋敷やその他たくさん土地を所有する『ベッケンナー商会』という、いわゆる会社みたいな組織の跡取り息子なんだそうだ。ここはその商会の本部兼自宅。もっと詳しく言えばお客様のための部屋。本部は街全体を四つに分けたうちの一つ、『レシタ区』というところにあって、その街というのがデ、デルバリゅ――

「デルバルゾ・マレーアだ」

そう、『デルバルゾ・マレーア』。舌を噛みそうな名前。海に浮かぶ島々を作る、海洋同盟という集まりのリーダー的存在。まあ簡単に言えば政令指定都市ってことだね。

「さつきから意味不明な単語を端々に使うが、ちゃんと理解しているのか」

「もちろん分かってますよ。ロイス・ベッケンナーさんが海に落ちた私を助けてくれたんでしょう？ 本当にありがとうございます。あとこれは、私の国の言葉に置き換えてるんです。ちゃんと理解するために」

「そうか。それは失礼した。しかし、お前は言い方が嫌味らしいな。『古代ヤーハン人』とはみんなそうなのか？」

あんたに言われたくないよ、と反論しようとして止めた。仏頂面に加えて傲慢で嫌味な性格だとしても、この人は私の恩人でしかも真正正銘のお坊ちゃんなのだ。楯突いたら追い出されかねない。

表向きはしおらしく装いながら「すみません」と謝ってみせたあと、話題をすり替えるために何でもないような顔をして「マラノさんはどうしたんですか」と尋ねる。

「マラノは娘のところへ帰った」

「そうなんですか」

残念、あの人がここにいたら殺伐した雰囲気にはならなかったかもしれないのに。すると逆に「質問はあるか」と問われた。

「質問があるかどうか考えたいので、頭の中を整理する時間をください」

「分かった。少し休憩しよう」

ロイスはテーブルから離れ、あの女の子が残っていたカートから水差しを手取る。やっぱり自分のだけしか淹れないんだな、と内心がっかりしつつ、私は痛くなったお尻をむずむず動かして椅子へ浅く腰掛け直した。

この空間は間違いなく現実だ。いくら納得できなくてもそう思い込むしかない。アニメや漫画なんかでよくあるシーンが頭に浮かぶ。何て言ったらいいのかは分からないけど、私は某アリスのような、いわゆる『異世界迷い込み』というスペシャル技を繰り出してしまったらしい。

言葉の壁がいきなりなくなってラッキー、とばかりに今まで訊きそびれていたことを次々ぶつけた。ここはどこなのか。どうして私がかここにいるのか。分かる範囲で構わないから、と頭を下げると、彼は嫌々ながらも思いのほか丁寧に教えてくれた。ちなみに制服と

鞆は違う場所に干してあるらしい。

みんなは私のことを『<sup>ソーラー</sup>古代人』と呼び、十数年に一度だけ神様が連れてくる違う国の人だと知っていること。私は海の神様に呼ばれたからこの街に来たこと。私みたいな人種は東の地方に多く暮らしていて、ニホンだとかジャパンだとか言う国の人間は、ここでは『<sup>ヤーハナー</sup>古代ヤーハン人』として区別されているんだということ。すごく物知りな人だ。

ついでに言えば、薄々気づいていながらも想定内だった『突拍子もない出来事』を正面から淡々と説明されて、半ばパニックにもなりかけた。自らがありがたくも説明してやっているのに、いちいち「嘘だ」「夢だ」と嘆く女がかなり気に障ったと見える。眉間にしわを寄せて彼は、私に説明の一字一句を復唱させたのだ。まあ、お陰でだいぶ冷静になれたんだけども。

それからどうでもいいことなんだけど、彼の発音から「マラーノさん」だと思っていたあの格闘家さんは、例の謎現象によって実はマラーノさんだったことが判明した。ネイティブでは「ラア」を強調して発音するということか……よく分かんないけど。

じゃあさっきの女の子は？ と尋ねたら、お坊ちゃんはいメイドさんの名前までは知らないらしく「あとで自分で訊けばいい」と突っぱねられた。あの子は私のお世話係なんだそうだ。友達にはなれないのかなあ。

考えが整理されていくうち、素朴な疑問が浮かんた私は右手を小さく上げて彼の注意を引きつけた。

「あの、ロイスさん。質問です」  
「何だ」

グラスを手にテーブルへ着いた彼の両目をじっと見つめる。

「私はこれからどうなるんですか？ 日本へ戻れるんですか？」

「……それを今話そうと思っていた。お前の今後にとって大事な話だ」

デルバルゾ・マレーアにはもう一人の『<sup>ソラー</sup>古代人』がいる、と目の前に座る彼は静かに続けた。名前はハンナ・バツータ。響きからして私と同じ人種ではないものの、きっと私の境遇を一番よく心得ている人間だろうとのこと。

「ハンナは海洋神ウルディノに仕える神官だ。普段は参拝客への祈祷が忙しくなかなか姿を見せないが、お前が来たことは知っているはずだから、直接会うのはそう難しくないだろう。機会を見て神宮へ連れて行く。それまでは俺が身の安全を保障しよう」

もっと分かりやすく説明してくださいと頼むと、彼の飾らない言葉がストリートに返って来た。

「もうしばらくしたら、当代神官にお前の今後を託すということだ」

私は返事ができなかった。ちょっとしたショックを受けた自分に驚いたのと、まさに住む世界が違う、それこそ今知り合ったばかりのこの人たちに愛着を感じていたのだと知って。

胸の奥から込み上げてくる何かを必死で抑えた。抑えながら、涙声を隠し切れないまま彼に尋ねる。

「あ、あのう。質問です」

「だからなん……………何だ？」

「私は、ここにいちやいけないんですか？」

ロイス・ベッケナーは答えなかった。心底意外そうに目を瞬かせる様子に居たたまれなくなり、こっちが先に折れて視線を絨毯の花柄模様へ投げ落とす。

そうだと言われて状況を受け入れる覚悟はできていない。我ながらバカな質問だとは思った。お世話になつて更に甘えるなんて子どもじゃないんだから。

でも、私は込み上げる気持ちに耐える自信もなかった。何故つてこの人たちがものすごく優しい人だと思ったから。『古代人<sup>ソーラー</sup>』とは知りつつも、自分たちと全く違う種類の小娘を拾ってくれた。しかも怪我まで診てくれた。お腹が空けば食事を用意し、誤解にしろ同じものを食べてまで安全だと証明してくれ、彼らにしてみれば常識外れな質問にもちゃんと応えてくれた。

彼らにどういう思いがあるのかは知らない。うまく利用されているのかもしれない。でも私自身がそうだと思ったのだから、これは優しさ以外の何物でもないんじゃないだろうか。

そんな人たちと離れたくない。

——待てよ、冷静に考えてみたらやっぱりバカで独りよがりな質問だ。すぐ撤回しよう。私は涙目を手の甲で拭い、鼻を嚙って改めてロイスの方へ向き直った。

「すみません。や、やっぱいいです。答えなくても」

さっきのは忘れてください、そう言おうとした口唇が自然とすぼ

む。無表情かつ無愛想なイメージしかかった彼が、今は何とも言えない顔を浮かべてテーブルを睨んでいる。

怒っているような、戸惑っているような。初めて見る、この人は実は私と同じ年ぐらいじゃないかと思えるような表情。

しばらくして彼は口ごもりながら言った。

「……いけなくは、ない。お前が望むのなら、そうなるようにやってみよう」

飲みかけのグラスを空けると同時に席を立つ。

「もうじき明け方だ。とにかく休め」

去り際、嫌味を全く感じない穏やかな調子で呟かれたなら、さすがに素直に頷くしかない。何だろう。何があったんだろう。

ほどなくして、お世話係の女の子が水桶と手拭いを持ってやって来た。彼女の名前を訊こう、そう心に留めていたはずが実行に移せない。

私の脳裏にはロイスのあの表情が焼きついて離れないでいた。

……申し訳ないけど、これじゃ休めないなあ。たぶん。

## 7・出会い・後編（後書き）

【今回登場した主な単語とセリフ】

・メア mea : 娘さん、お嬢さん（未婚女性に対しての呼びかけに使う）

・ウイウレ トウ スイ？ Why ure etu si？ :

あなたは誰ですか

・ワイ ナナス トウ スイ？ Why nanas tu s

i？ : あなたの名前はなんですか

あとは話の中に出てきたとおりの意味です。

## 8・祝いの夜・前編

n e m , j y a a s o l a r . (祝いの夜・前編)

「ええっ！？ 正気ですか坊ちゃん！ いくら各支部の商長が集まったとはいえ、宴席には末端の担ぎ手や、商会とは関わりない船乗りたちも招待されているんですよ。万が一危なっかしい事件になりでもしたら……ああ、あたしは怖くてたまりません！ 本当にあの『<sup>ソーラー</sup>古代人』のことを、モガガ」

「おじさん。声大きい」

夕刻。邸の一室。午後六時を告げる御神鐘が街に響く中、ロイスは鼻息荒いパコット・ダミエの口を手で封じた。

もうじき祝宴の会場となるであろう広間には、すでに多くの人々で賑わっている。彼らの笑い声を始め、使用人たちの慌ただしい靴音が通路と壁に隔てられたこの仕立て部屋にもしっかり届いていた。手袋越しのちよび髭が大人しくなったことを確認すると、ロイス・ベッケンナーは静かに息を吐いて目を閉じる。

（おじさん、すまないが私はマラノを連れて先に戻っている。あのことはおじさんに任せてもいいだろうか）

（へっ？ そりゃまあ、あたしゃ一向に構いませんけども、どうしてまた）

（理由は屋敷に着いてから話すよ）

男との口約束を果たしたのは翌日、空も白みきつた頃。ちょうどロイスが昨夜の商品を市場販売用と更なる取引用とに分けるよう指示を飛ばしていたときである。

それまで彼は、あわよくば適当な身の上話でもでつち上げて場をごまかそうと企んでいた。だが噂好きの喋り好き、加えて『商会一のちゃっかり者』で有名なこの中年男を適当にごまかすなど、不可能に等しいのだと改めて思い知らされた。

台所番の女中が使われていないはずの客室へ出入りしている。副頭領が人らしいものを背負っているのを衛兵が見たらしい。

どこからどう仕入れたのか、いそいそと馳せ参ずるなり何ともはぐらかしようない噂話をわざわざ持ち出す年長者を前に、人生経験の浅い若者は真実を告げるより道はないと渋々腹をくくった。

彼の無尽蔵ともいえる噂の情報網が、逆に助けとなることを祈らざるを得ない。のらりくらりと泳がせるよりもむしろ、完全な味方として引き込んでおいた方が得策ではないかと考えてのことだった。

「要は、周囲に悟られなければいいんだろう」

ゆっくり放した腕をそのまま顎先へ持つていき、ロイスは考え込む素振りを見せる。

窓から差す西日が二人の足元と衣装を剥ぎ取られた人型たちに長い影を作った。

「頭領はどこまでご存じで？」

「おじさんやマラノが知っている事実をすべて伝えている。もちろん、これから私が皆に話すこともだ」

日中に多忙な父を捕まえるのは至難の業だが、自らの睡眠時間を犠牲にすればさほど難しい問題でもなかった。起床係の仕事を奪って寢室の扉を叩けば良いのである。

私室へずかずかと押しかけ、起き抜けにも関わらず極めて重大な秘密を打ち明けるなど、いくら親子でも失礼に値する。しかしロイスには悠長にしていられる時間がなかった。一商会の頭領ともあるう者が、部下の重要報告を他の客と同じく初めて耳にするとなつてはそれこそ無礼千万だからだ。

——<sup>ソーラー</sup>古代人を保護しています。

一連の詳細を聞いた父、デイベスは言及するよりもまず息子の変わっていない身なりを咎め、「少しでいいから早く休め」と叱りつけた。

「母を泣かせるな」

たった一言に強い罪悪感が胸の内を抉る。それから父は穏やかな調子で了解の意を示し、彼が祝宴にて話したいと申し出た内容について、助言を始めたのだった。

「父の考えは私が思っていたのとおおよそ同じだった。<sup>ソーラー</sup>古代人の存在そのものを隠すのは簡単だ。だが、我々は『3・S』（サイエス）<sup>デルバルツ・マレーア</sup>の夜に戻っている。しかも彗星が落ちた場所に、だ。いくら何でも一言も触れないで置くのは怪しすぎるだろうさ」

「それで、坊ちゃんや頭領はどういうお考えで……」

青年は不安そうに訊ねてくる男を前に、僅かに目尻を細めてその先を制する。しかしすぐに不敵な笑みを湛え、怯んだ彼をなだめるように言い聞かせた。

「悪いがそこまでは教えられない。父も私も、パコットとマラノには『事情をよく知る役者』になつてもらいたいと考えているんだ」

一足先に広間へ向かい、今から言うことを実行して欲しい――。

おそらく父、デイビスもまた邸のどこかで側近に命じているだろう依頼を、ロイスは密輸でも持ちかける闇商人のように、低く低く声を落としながら淡々と説明した。

「それじゃあ坊ちゃん、先に宴席でお待ちしますよ。本当に本当に、古代人<sup>ソーラー</sup>と会わせていただけなんですよね？」

「ああ。会つてもらえるよう状況を整えてからになるだろうが、必ず叶えるよ。例の件、手筈どおりに頼む」

お任せを、と口唇を引き結んだ男が肉厚の背を丸めて部屋を出て行く。

落ち着きのない足音が遠ざかるや否や、ロイスはよろよろと後ずさり窓枠に背を預けた。そして重い荷物をやっとの思いで手放したような、深く長いため息を吐いた。

「ちょっと、まずいな……」

赤く染まる天井を仰ぎながら独りごと。

長旅の上、ほとんど寝ていない彼にとって、今宵の祝宴は苦行と言っても良かった。いつ終わるかも分からない酒杯と歓談を思うと眩暈がしそうだ。鼓動のリズムに合わせて後頭部がズキズキと痛み、時折強い眠気を引き起こす。衝動に任せて髪を掻きむしりたくなる。どうにかそれを抑えようと、頭へ伸ばしかけた右手を静かに襟元へ下ろし、窓ガラスを鏡代わりに自らの盛装を飾る白いクラヴァットを締め直した。

燕尾を思わせる上衣の背裾をしつかり後ろへ流し、両袖のボタンがしつかり留まっているかを確認し、最後にうなじの結び目と前髪を整える。夕闇に溶けてこちらを睨む褐色の瞳がひどく不機嫌そうだ。そして眉間に刻まれた深いしわに気づいたとき、ふと何故か昨夜接触した古代人<sup>ソラー</sup>の怯えた表情が脳裏に浮かんた。

扉を開け、初めて対面した瞬間。

あのときもかなり眠かった。

眠かったついでに「大げさなご降臨<sup>ブライトメ</sup>の割には俺たちと変わらん」だとか「マラノの言うとおり、その草原系の使用人とほとんど同じ顔立ちなんだな」だのとぼんやり考えていた。もしかするとあの娘——ミツルは、眠気に耐えている自分の目つきが怖かったのかもしれない。もっとも、その後は微笑んだり嫌味を言ったり泣いたりするくらいには、ある程度気持ち素直に表現できていたようだ。

（私は、ここにいちやいけないんですか？）

……弱気になっっているんだろうか。泣き顔まで思い出すのは、余計だ。

ロイスは鏡の視線を避けるように、前髪をつまんでいた右手で目元を覆う。そして娘の記憶を部屋へ捨て去るかのように、喧騒飛び

交う会場へ颯爽と向かった。

まずかろうと何だろうと自分がしたくてなした行為だ。相応の責任を果たそう。

そう心に決めた。

\*

仕立て部屋を出て、廊下を右へ。恭しく道を開ける使用人たちを横目に、今しがた点けられたばかりの天井灯を二つくぐれば、左手に応接間を臨む邸宅の玄関ホールが見えてくる。

「よ、ロイス！ 久しぶりだな」

「誰かと思えば……ルヴァじゃないか！」

黄昏へせり出した象牙色のポーチに開け放たれた玄関口付近、そして光差す広々としたホールには、着いたばかりの招待客が十数人ほどたむろしていた。すると突然、その中の一人がお決まりの挨拶口上を述べる客たちを無視してあからさまな大声を上げる。ぐいぐいと周りを押しのけてやって来る相手を前に、ロイスも思わず頬を緩ませた。

シルヴァノ・プラント。ミエノ区に本拠を構えるプラント商会の三男坊である。彼の父と長兄が仕切るプラント商会は、中規模ながら服飾を中心とした個性的な商法を扱っており、ベッケンナー商会と一部の業務について互いに協同しあう関係にあった。おそらく商

会代表として招待されたのだろう。

「まさかお前が来るとは思わなかった」

「だろう？ オレも驚いてる。親父が氣を利かせてくれてね、『堂々と親友に会って来い』だとさ」

言って彼は上着ポケットから素早く封蝋付きの手紙を抜き取り、慌てて駆け寄ってきた使用人頭にサツと差し出した。

そのささやかな暇いとまでさえ、付添いの夫人方や女中らがこちらをチラ盗み見るにつけ意味深な目配せと甘い微笑みで嬌声を上げさせている親友の姿に、ロイスは呆れてものも言えなかった。

だが特別今に限ったことではない。『街いちばんの色男』と評される彼に言わせれば、老若問わず女性たちは自分にとってみな愛すべき恋人なのだ。

鰐広の羽根帽子に見え隠れするすっきりとした栗色の短髪、瞳は地中海を映した翡翠。黒を基調とした商団制服を着込む細身でかつ筋肉質な体つき、加えて長身、日に灼けた小麦色の肌を眼前に晒されては、仮にそれが初心な少女たちであつたならすぐにまいってしまふだろう。

相変わらずだ。

中肉中背の親友がようやく発した、ため息にも似た小声に対して、ふと愛想を振りまくのを止めたシルヴァノは首を傾げ意地悪く笑ってみせる。

「再会する頃には、オレが節制を尊ワイアットぶ紳士にでもなってるんじゃないかと思つたか？」

「いや。全然」

即答するや、意地悪い笑みが突然快活な笑い声となった。釣られ

てロイスも吹き出した。

「決まってるだろ。お前が紳士ぶるのは、本気の恋愛に持ち込みたい女が同時に迫ってきたときだけだ」

「おっと、言ってくれるじゃねえかロイ坊ちゃんよ。オレがいつ紳士ぶってたって？」

「もう忘れたのか。健忘症なら詰め所に行って診てもらえ。二ヶ月前に花街通りの角で泣き喚かれた拳句、鳩尾みそおちと頬を殴られてたのは、何処のどいつだ」

「見られてたのか……。ちょっと待て、さてはキアラだな。あの野郎いつもは『ルヴァの女癖の悪さなんか興味ないね』なんて言っときながら、あるとき妙にオレの身边を嗅ぎ回るからおかしいと思ってたんだ。ロイ、どういうことだ、説明しろッ」

「どうもこうも、そういうことだ。ああ、しかしあれは傑作だった。思い出すたび腹がよじれる！」

恐れ知らずの若者たちは、盛り上がった内輪話を止める術を知らない。ギョツとする周囲に目もくれず肩を震わせてひとしきり笑い合った。やがてほとぼりが冷めると、シルヴァノがおもむろに崩れた衣装を手早く直し、帽子のつばを軽く持ち上げながら直立して相手を見据えた。

「ロイス・ベッケンナー殿におかれましては、このたびの旅商及び商談の無事完遂とご帰還、まことにおめでとうございます」

翡翠色の双眸がまっすぐ自分を見下ろしている。ロイスは主催らしい優雅な立ち姿を崩さぬまま、口元に軽い笑みを浮かべ歓迎の意を示した。

「ミエノ区プラント商会長に代わりまして、このシルヴァノ・プラ

ントが心からのご挨拶と歓待への感謝を申し上げます」

「感謝の意、大変嬉しく頂戴します。ようこそいらつしゃいました、シルヴァノ殿。せめてものもてなしではありますが、飲み物などを用意させましたので、心行くまでお寛ぎいただきたい」

口上を述べて二人は各々軽く握った右手を左の胸元に置いて頭を垂れ、その後握手を交わす。『心の中まであなたを信頼します』という意味を持つ、海洋同盟ではごく一般に知られる男性同士の儀礼的挨拶である。

「そろそろ始まる。こつちだ、案内しよう」

「おう」

たまたま周囲にいた招待客たちの挨拶にも応えていたロイスだったが、そのすぐあと来客の途絶えた一時を見計らいシルヴァノの斜め前方へ滑るように進み出た。広間は玄関ホールから見て中央に陣取る大階段を昇った先にある。

午後七時。

晩秋のベッケンナー商会本部の空は、肌寒い風が吹き流れていた。

## 8・祝いの夜・前編（後書き）

コンパクトにまとめるつもりがまたしても長くなってしまった。  
続きます。

### 【今回登場した単語】

・ヤーソラ jyaa solar : 祭典、祝宴、祭り  
・プライトメ praat mee : 東部大草原同盟に広く分布  
する人種の総称。草原系。  
・ワイアット hwiaatt : 騎士、紳士（のちに騎士そのもの  
が廃滅し、現在は騎士道を重んじる人や紳士という意味合いで用い  
られる）

更新日同日、作品中の一部を改稿させていただきました。

## 9・祝いの夜・中編

van , jyaa solar . (祝いの夜・中編)

祝宴といえば、ある程度の資産を持つ商人ならばたいいは邸宅のほぼ中央に設えられた中庭で行うのが世間の通例であつた。

もちろんベッケンナー邸にも例外なく広い中庭がある。そこは象牙色の柱廊と色彩豊かな花々に囲まれた大変優美な空間で、頭領の趣味が起因してか思索に耽るには少々派手すぎるが、気分転換がてら散策するにはうってつけの場所だ。

しかしながらこの時期は風が冷たい。

招待客を長い間外気に晒してはならないという何とも明快な理由で、会場は急きよ広間となつた。奥に舞台を備えた、普段は音楽会や演劇を楽しむためのものである。親友を二階へ案内しながら、ロイスは近づくにつれて確実にざわめきを増す話し声に頬を引きつらせた。そして何となく予想していたとおり、ざつと五十人はいるであろう場内を見回すや、「変更して良かった」と力強く思った。

——これのどこが『僅かな規模』だ、と。

「さすが、同盟指折りの商会は土地も広けりや部屋もでかいな。おまけに天井も高い。うちの応接間が縦に収まるぜ」

「世辞はいいから、早くその口元を締める。緩みきつてゐるぞ」

今すぐ父を問い詰めたい気分だったが、冷静になってみれば納得できる部分の方が多かつた。そもそもが派手物好きの父である。自

分とは美的感覚が異なるのだ、『僅か』の基準が違っていていても不思議ではない。

本部及び近隣の支部に身を置く商長、旅商に同行した団員と船乗り、得意先の代表とその同伴者たち。めいめい鮮やかに着飾って談笑するさまは、なるほど広間のきらびやかさとよく合っていた。半年前、同じ場所で催された流行の芝居を観たときには、舞台のすぐ上でぎらつく水晶のシャンデリアが嫌に目障りだったのに。

「じゃあな、オレは隅の方で大人しくしてるよ」

シルヴァノは一步退き、招待客が主催の下へ集まり出す前にと手短な挨拶を済ませた。

「いいかロイ。主役だからって変に肩肘張る必要なんてないんだからな。適当に流してりや自然と時間が過ぎるもんさ」

「ああ、分かってる。そう言うお前こそ、遊ぶつもりなら程々にしておけよ」

「うん？ 何のことだ？」

ロイスが皮肉混じりの笑みを投げると、それに応えるように相手もニヤリと笑う。そして広間をうろついていた給仕の手から葡萄酒ワインを受け取るなり、壁際に所在なさげに佇んでいる麗人の方へ歩いて行ってしまった。

確かに、大っぴらに事をしでかす気はないらしい。しかし『街いちばんの色男』に関わる浮名を自ら流すことには、むしろわざとなのか、全く問題ないようだ。

（……やっぱり相変わらずだ）

本日二度目の、ため息に似た小声をそっと漏らしたときだった。

「坊ちゃん」

次から次へと労いの言葉を掛ける先輩商長たちや、慶事への感謝を述べる得意先らの後ろから、堂々とした存在感とともにマラノが現れる。周囲よりも頭が一つ分飛び出ている背丈もさながら、鍛え上げられた浅黒い体躯には華やかな盛装が恐ろしいほど似合っていないかった。

「お待ちしておりやした。そんじゃ、おれは頭領をお呼びして参りやす」

「あ、ああ。頼んだ」

袖にあしらったフリルは言わずもがな、首元のクラヴァットなどまるで野獣に被せた猿ぐつわだ。目にした皆が引きつった表情を貼りつける中、親しい間柄にある商長らは笑いを堪えてか急に口を閉ざし、ロイスもまた動揺を隠し切れないまま応えるのが精一杯だった。当の本人は気にも留めていない。

何を隠そう、彼の衣装はお針子女中の責任者を務める愛娘が丹精込めて拵えた、数年前の贈り物なのだ。サイズが合わずボタンがはち切れそうになっても着続ける父親の姿を、滑稽には思いこそすれ誰が後ろ指を差すであろうか。

出入り口へ向かうマラノが、ロイスのすぐ脇を通り過ぎたと同時に「準備は整っておりますんで」といつもの調子で言い放つ。表向きは宴の用意ができたと報告したに過ぎない。周りの人間たちにもそう聞こえただろう。しかし青年には、彼の真意がしっかり伝わっていた。

手筈は整った。広間にいる大多数の者がマラノによって、パコットによって、あるいは又聞きによって『それ』を耳にしている。

「ありがとう。マラノ」

大男の長靴が床を踏みしめる音を背に、ロイスは些か挑むような心持ちで再び周囲を見回した。彼らは皆、礼式の挨拶と世辞を並べる裏で自分の語る話を心底聞きたがっているように思える。期待に満ちた瞳は爛々と輝き、『それ』を目にした団員ですら半信半疑といった表情でこちらを伺っている。まるでこの空間すべてを掌握したかのような優越感を味わいながらも、主催者たる若者はおくびにも出さず至極平静を装った。

「さあ皆さん。頭領がお着きになるまで、今しばらくの歓談といたしましょう」

給仕を呼びつけ葡萄酒を手取る。右手でつまんだそれを目の高さまで持ち上げると、シャンデリアの明かりがグラスに反射し、若者の褐色の瞳が冷たく光った。

\*

午後七時半。闇が弓弦の月を引き連れて重いとばりを下ろした頃、レシタ区大通りに面したある食堂は一時の賑わいを見せる。

途絶えることのない金属音、漁夫たちの歌声、打ち鳴らされる手拍子。夜空に浮かぶ星々は、響く船歌に身を乗り出すようにしてきらりと瞬いている。

デルバルゾ・マレーアの夜がこうして更けていく中、大通りを一本逸れた先のレンガ塀に囲まれた屋敷では、小さな祝いの儀が粛々

と行われようとしていた。

「——今日も我々は大いに働いた。海洋神の加護の下、伝統ある同盟の『自由と責任』の教えを胸に、我々は納得ゆくまで働き、一日を終えた。わたしは自分の成し遂げた仕事に一つの後悔も持つてはいない。皆もそうであることを祈ろう。そして、今わたしの横におる若者もまた、一つの大きな仕事を終えて帰ってきた」

閉め切られた広間。そこへ一堂に会した五十余人の招待客は、舞台下に立つ二人の男を見据えている。

「ロイス。乾杯の挨拶を」

藍色の布地に金糸を縫い込んだ豪華な装いを揺らしながら、デイス・ベッケナーが傍らの息子へ一瞥を投げて後ろに退いた。ロイスは軽く頷き、譲られた位置へと進み出る。

シャンデリアの降ろす光がやけに眩しい。細かい事象がいちいち気になるのは、自分が緊張しているからだだろうか。グラスの首を持つ指先に力を込めながら、微かに目を細めて前方を捉えた。

「皆さん。今宵は急なお知らせにも関わらず、不肖、私<sup>わたくし</sup>のためにご出席くださり本当にありがとうございます」

当たり障りのない、脚本どおりの言葉をよどみなくなぞっていく。今回の宴を開いた経緯と、出立に際し賃金などを出資した先輩商長、得意先らの顔を立てた改めての感謝の意。道中起こった面白おかしい出来事で場を沸かせることも忘れない。そして帰途の船上にて自らが主張した無理難題を簡潔に述べ、過ちとして恥じ、船長を始めとする船乗りたちへ頭を下げる。最後に旅商をともした仲間へ、心からの労いを示して挨拶はいったん区切りを迎えた。

「さて……もうご承知のことと思いますが、昨夜私どもが帰着しました折、街はさながら祭りの夜のように活気づいておりました。皆さんもご覧になったのではないのでしょうか。」<sup>サイエス</sup>「3・s」を」

待ちかねたような雰囲気漂う。

「私は甲板にて、その瞬間から最後までをずっと見ておりました。皆さんの中に、私と同じく初めてあれを目にした者はどれほどおりますでしょう。本や絵画を通して知ってはいたが、実物とは程遠いまるで至高なる神々が直接私に語りかけているようだった。この上なく恐ろしく、だが研ぎ澄まされたように美しい。足がすくむというのはあの場面を表していると言っても過言ではないように思います。文字にも絵にも起こせない、見た者にした分らない感覚。私は生まれて初めて見たあの空を、今後何度目にすることがあるとも一生涯忘れはしないでしょう。そして、図らずも『3・s』の夜に戻り、同じ時間をもにした皆さんを前にご挨拶を賜った私にはどうしても、海洋神を祀る民の責務としてこれだけはお伝えしなければならぬように思う」

やや演技めいた言い回しのあと、わざと一呼吸置いて周囲をぐるりと見回す。

「昨夜。私はデルバルゾ・マレーアにご降臨なされた古代人<sup>ソーラー</sup>とお会いしました」

案の定、俄かに沸いた複数人のどよめきが瞬く間に広間全体へ広がった。

「やっぱり！　ね、ね、そうですね。あたしがお教えした

とおりだったでしょう」

その複数人のうちの一人、パコットが誰よりも素早く大きく喉を震わせたのには（やりすぎだ……）と呆れはしたが、ロイスは期待どおりの手応えを受けて半ば勝ち誇ったように強く口唇を結ぶ。やはり、群衆を信じ込ませるには少し大げさ過ぎるくらいがちょうどいい。

「いや、お会いしたと言うには語弊が伴うかもしれない。乾杯の挨拶としては少々長くなりますが、どうかお聴きいただきたい」

再び静寂に包まれた広間にて、ロイスの演説だけが朗々と響いていた。この場の誰もが、彼の一挙手一投足を逃すまいと全身を耳にして聴き入っている。彼の後ろに佇む、一人を除いては。

あれはマレ・ポルトガに帰着後。屋敷への伝令をマラノに任せたところ彼の帰りが遅く、自らも街へ入ったときのことだ、とロイスは語り始める。マラノは娼婦街の入り口に立っていた。見れば人買いとおぼしき中年男と、これから売られるらしい、あどけない娘がぐったりした様子で男の足元に座り込んでいた。

よくある光景だ。だが話をよく聞くと娘は岸壁に打ち上げられ、記憶を失っているという。これでは自分から金のため身を買ったのか、それとも親が食い扶持を減らすために差し出したのか、そもそも身内がいるのかどうかさえ分からない。契約を交わした商人さえ分からぬ、そんな娘を拾って儲けを働く。ましてや神々が起こした奇跡の日に敢えて商売の掟に反する行為を起こすとはどういう見か、とマラノは吼えた。

両者が引く気配はない。ロイスはこのままでは埒が明かないと考え、有無を言わせず人買いに言い値の半分を突き与えた。これで手を打て、代わりに娘を商会で働かせる、と双方を納得させ、ひとま

ず娘をマラノに任せて自分はマレ・ポルトガに戻ることにした。

その途中だった。

街の南東、ウルド湾にそばだつウルディアーナの塔。月光が照らす白亜色をした小さな要塞の頂上に、紛れもない人間が立っていた。

「あなたは古代人なのか」

人影を見つけた途端、背筋を走った寒さに打ち震える。ロイスは神がかり的な何かを感じ、気がつくと塔の袂<sup>たもと</sup>まで走り出していた。辺りは不気味なほど静かだった。

そうして辿り着いた彼は思いついたそのままの言葉を叫んだ。呼びかけが届き、人影が彼を見下ろす。真夜中にも関わらず、その姿をはつきり捉えることができた。振り返った人間は女性<sup>ネネイ</sup>だった。月の光が彼女の背に降り注いでいたのである。

長い黒髪が夜風に散らばり、死に装束にも似た黒衣の肩口を何度も撫でている。肌は絹を当てたような白、口唇は赤く艶やかで、強い意志を秘めた眼差しは見つめられただけで心の奥底まで見透かされそうだ。地上に存在する美は、きっと彼女の前に屈するに違いないと確信するほどであった。

彼女はすぐさまロイスに応えるわけでもなく、ただ超然と地上を俯瞰<sup>ふかん</sup>していた。どれくらいの時間が経っただろう。一瞬だったのかもしれないし、数十分と睨み合っていたのかも知れない。

そこから一歩も動けぬ男へ向けて、とうとう彼女が口を開きかけた。

## 10・祝いの夜・後編

j z y u e , j y a a s o l a r . (祝いの夜・後編)

「それで、それでどうなったんです？ 古代人<sup>ソーラー</sup>は坊ちゃんの呼びかけにどう返答したんですか？」

「パコット！ 話の腰を折るんじゃないッ」

広間を支配していた緊張感は、極限まで焦らされ我慢ならなくなつた小太り男の一声によつて呆気なく事切れてしまった。人目もはばからず絹地の頭巾をはたいた同僚商長の言動は、同席する招待客らの心情をよく表していた。

何とも言えぬ気まずい空気が漂う。そんな中一人ロイスだけが忍び笑いを漏らして言った。

「大丈夫だパコット、それにセラネル商長。あと少しで終える予定だったんだ、要点だけをかいつまんでお話ししよう」

さつきまでの厳肅さとは打って変わり、まるで冷え切つた雰囲気とを和ませるように、穏やかな調子で語り始める。

娘が口を開きかけたそのとき、街の大通りから幾人かが息せき切つて駆けてきた。暗がりながら、全員が海洋神のシンボルである鉾と羅針盤をかたどつた紋様を身に着けており、一目で当代神官に仕える者たちだと分かつた。

彼らは口々に娘へ声を掛け、塔を登つて恭しく歩行を促す。やは

り彼女は古代人だったのだ。そして海洋神ウルディノの庇護に下った。

「——以上が私の見たもの、聞いたものの全てです。今頃古代人は神宮で手厚い保護を受けているでしょう」

「あのう、ロイス様。ロイス様がお助けになった女性は……」

恐る恐るといった体で、得意先の夫人が尋ねる。

「そちらもご心配は無用。どうも疲れているらしく部屋で休ませておりますが、目立った外傷もなく安堵しております。記憶が戻り次第詳しい事情を聞き、身元を照会した上で今後の処遇を決めるつもりです」

言い切ったあと、夫人の安らかな表情を見届けて青年は言葉を続けた。

「当代神官に続き二人目の古代人がこの街においでくださった。その奇跡の夜に私は戻り、古代人を垣間見ることができた。これは『サイエス3's』が……いや、海洋神が我々を祝福してくださっているに違いありません。今後デルバルゾ・マレーアはますます活気づくことでしょう。そしてベッケンナー商会と、我々をご支援くださる皆さんの明日に多くの恵みがもたらされるようにと心から願って止みません。さあ、大変長らくお待たせいたしました。皆さん、どうぞお手を」

陶醉とはこのことを言うのだろうか。あれほど気にかかっていたシャンデリアの輝きが、今は自分を照らす曙光にさえ思えてくる。指先で摘まんだグラスを目の高さまで持ち上げ、絶妙の好機を待って高らかに言い放った。

「乾杯！」

一斉に一口を煽った直後、広間に割れんばかりの拍手が沸き起る。『3・s』に乾杯。デルバルゾ・マレーアに、ベッケンナー商会に乾杯。めいめいの掛け声と口笛と労いの叫びに囃されて、ロイスは照れ臭そうな笑みを一瞬浮かべた後に父を振り返った。

「誇張し過ぎましたか」

「いや、良い出来栄えだった。わしの教えたとおりだろう。少し大げさな方がちょうどいいのだよ」

不敵に笑いながらデイビスが葡萄酒を空ける。あらかじめ広間の中へ不確かな噂を流すことで、人々は真相を知りたがる。そこへさながら舞台演出のごとき段取りを使って事実と虚構を織り交ぜた真相を明かし、相手の好きなように解釈させるというのが彼の考えたった。成功すればそれで良し、たとえ不審に思われても当然の古代人は容姿も境遇もでっ上げなのだからのらりくらりとかわせばいい。デイビスらしい、大胆で博打じみた作戦だ。

「父上。ところで、次の商談ですが――」

「これロイス。酒の席に仕事を持ち込むでない。今宵はお前のための宴だぞ、もつと羽目を外しなさい」

「しかし」

青年の言い分を遮って、広間の中央から野太い声が響く。

「ロイス様、そんな辛気臭え顔させてちゃ酒がまずくなりまさあ。こつちへおいでなせえ！ 頭領もさあさ、こちらへ！ 皆と楽しみましようやー！」

既に酒盛りと化した集団の中からマラノが数歩踏み出し、二人を誘った。パコットによる爽快な繁盛唄を筆頭に、招待客らは職種を越えて談笑と踊りに興じていた。騒ぎをじっと見つめていた父子は互いに顔を見合わせ、肩を竦めて輪の中へ入っていく。

「この調子ではすぐに酒が尽きてしまうわい。そこのお前たち、酒蔵からありったけの葡萄酒を持って来い。とっておきの瓶も余さずにな、ワッハッハ！」

頭領の大盤振る舞いに会場が沸いた。ロイスは先輩商長に肩を組まれ、否応なしに騒ぎの中心へと引きずり込まれる。挨拶疲れからか突然襲った眠気と闘いながらも覚悟を決めるしかなかった。

何にせよ一仕事終えたのだ、浴びるほど飲んでも構うまい。

やがて使用人が抱えて来た大量の酒瓶を、ロイスはやさぐれた気持ちで睨みつけるのであった。

\*

デルバルゾ・マレーアの空に塩気を孕んだ夜風が吹きつけている。儀式めいた祝宴は開始から二、三時間のうちにあっさり終わりを迎えていた。時刻は夜半をとくに過ぎ、草木も眠る明け方前、場所を変えて身内だけを招いたごく小さな宴会がようやくお開きとなる。

「ロイス、今夜はどうもありがとう。旅のお話をたくさん聴けて、母はとても楽しかったわ。あなたも楽しめていたなら良かったのだ

けれど。どうかゆつくり休んでちょうだいね」

「はい。私も母上と久しぶりにお話ができて大変嬉しかったです。母上こそ、お酒を召し上がったのですからお体には十分気をつけてください。それでは、おやすみなさい」

伏し目がちに息子が母の手を取り、そこへ慈しみを込めた口付けを施すと、クレアは我が子に受け継がれた茶色の釣り目を緩ませて愛おしそうに微笑んだ。二人の侍女を従えて夫デイビスとともに寝室へ帰っていく。

マラノは一足先に娘が待っていると慌てて戻っていた。パコットはつい先ほどまで酒宴での働きぶりを自慢げに披露していたものの、突然仰向けに倒れて眠りこけ、今しがた使用人に抱えられて部屋を出たところだ。

本部に常駐する親しい商長らも、一人また一人と邸外の自宅へ戻った。最後に両親の背を見届けたロイスは、今度こそ一仕事終えたとばかりに深いため息を吐いた。

「ロイス様。お部屋までお送りさせていただきます」

「いやいい、自分で歩ける。お前にも長いこと苦勞を掛けたな。他の仕事も残っているだろう、もう下がっていい」

「まこと恐れ入ります。それでは、のちほどお部屋へ酔い覚ましの煎じ茶をお持ちいたしましょう」

「ああ。私からも頼む」

隅に控えていた使用人頭が「おやすみなさいませ」と一礼して扉を閉めたのを最後に、ここ談話室に残されたのは彼のみとなった。

大の大人が十人ほど集まり、ついさつきまでは息苦しささえ感じていたのに。決して広くはない室内は穏やかな静謐せいひつに満ちていた。中央へ置かれた低い猫足テーブルには空の酒瓶とグラスが無造作に並び、暖炉には燃え尽きかけた薪が黒く燻くすぶっている。

ロイスは後頭部を押さえながら千鳥足で踵を返し、手近に置かれたスツールへどっかりと腰を下ろした。

まずは誰もが興味を抱えて止まない、古代人の虚像を与えてやった。これでいくらかの時間は稼げるだろうが、すぐにでも噂は街中へ広がるだろう。その前に彼にはやっておかねければならないことが山ほどあった。古代人の周囲に危険が及ばぬよう、信頼できる者たちを選び守りの体制を整える。また少しでもこちら側に溶け込ませるため、最低限必要な知識と教養を身に付けてもらう。この二つが当面の課題だ。

後者は既に適任者を見つけてあり、今日から（厳密には昨日からなのだろうが）出向いてもらっている。

「ロイス。あなたは仕事の依頼をしているつもりなのでしょうけど、私はそのつもりなんてこれっぽっちもないわ。話を聞いたときからずっとそうよ。私はただ純粹に、古代人の力になりたい。しかも相手は古代ヤ<sup>ヤハナ</sup>ーハン人かもしれない、女の子ならなおさらだわ。今日の昼過ぎからよね？ もちろん行きますとも。だけど報酬も特別休暇も結構。この件に関しては私の自由にさせてちょうだい。そして私にその話をするときは、今後一切仕事の顔を貼りつけて来ないで」

とは本人の弁だが、これ以上口出しすると余計な火の粉を浴びかねないので、言葉通りの自信を受け取っておいた。好きにさせてくれと言われればこちらが言うことは何もない。任せてしまってもいいだろう。

問題は前者の方である。

頭に浮かぶ候補から誰を加えて誰を遠ざけるかを考えるうち、出し抜けに暖炉の薪がバチンと大きく爆ぜた。やがて湧いたあくびと

ともに強烈な眠気が再びロイスを襲い、思慮を放棄させようとする。耐えられなくなったロイスは開いた両膝にそれぞれの肘をつけるようにしてぐったりとうなだれた。たびたびシルヴァノや他の友人らと飲み明かすことは過去にもあったが、それにしても少々無茶をしすぎたかもしれない。

このまま床で眠ろうかななどと半ば本気で悩んだ。しかしいずれ片付けに訪れるだろう使用人の手前、下世話な醜聞となっても困る。

……とりあえず小難しい思慮をこそ床へ放り投げて、体は寝所に預けよう。なけなしの理性を駆使して青年が出した答えは単純であった。

廊下に点々と灯る明かりだけが頼りだった。普段ならばほんの数分で辿り着く道のりを、ロイスは前屈みの姿勢を取りながら壁に手をついて一步一步進んでいる。

やはり使用人頭が進言したとおり部屋まで案内させればよかっただろうか。幼い頃から何ら変わらぬ景色であるにも関わらず、暗闇と酔いでいまいち方向感覚がつかめない。

「誰がいるか」

答えはなかった。自らの掠れた声だけが辺りに鈍くこだますと、青年は肩を落とし再び歩みを進める。

ようやく夜目に慣れてきた頃だった。壁際に置かれた長椅子を避けるようにして通り過ぎたとき、ふと誰かの気配を感じてすぐ横を睨みつける。そこにいたのは自分の姿だった。椅子の上には、父が交易で手に入れた美しい細工の壁掛け鏡が飾られていたのだ。

虚ろな色を映す双眸を見つめるうち、ロイスはとある娘の顔を思い出した。二人とも似たような褐色をしているからだろうか。これまで古代人としての彼女の動向を考えないときはなかったが、祝宴

前の仕立て部屋での一件のように、自らの瞳の中に『ミッル・イマ  
イ』という娘を見出すことは時折あった。  
すると必ず、忘れようにも忘れられない彼女の言葉が耳を通して  
脳裏に響いた。

（私は、ここにいちやいけないんですか？）

何故あんな質問をしたのだろうか。出会って間もない人間に対し、  
「まだここにいたい」とも解釈できる質問を。

最初は意味が分からず啞然とした。少なくとも商いを志す者なら  
ば、初対面でいきなり相手の懐に飛び込むような態度を示すなど以  
ての外だったからだ。せつかく無償で得た衣食住の場が惜しいのか  
そう無理に納得させてはいたが、どうも彼女の幼稚な言動には似つ  
かわしくない気がして、腑に落ちなかった。

そんな相手へ、何故らしくもない安請け合いをしたのだろう。お  
前が望むのならそうなるよう取り計らおうと。今もそうだ、自分は  
数日間どころか、出来る限り彼女が屋敷内で安全に暮らせるように  
と考えを巡らせていた。

哀れにでも思ったか。いや違う、古代人はあくまでも利益をもた  
らす対象でしかない。では長い期間世話を続けて恩を売っておくか、  
さもなければ手近に置くことで身边を注視しやすくするためか。否、  
それさえあとからこじつけた結果論でしかない。

口達者な適任者の弁を借りれば、あのときロイスはただただ純粹  
に彼女の望みに応えたいと思った。だが理由を説明できない。根拠  
のない事実が彼をひどく混乱させた。

分からない事象への恐れ。それは彼自身が父であるデイビスに抱  
いている感情とよく似ていた。しかし決定的に違ったのは、恐れと  
は逃れたいと願う恐怖そのものではなく、得体の知れない『彼女』

に対する興味と好奇心から来るものだったということである。

ミツルが暮らしていた異世界とやはら、一体どんなところだったのだろう。家族はいたのか。友人は。職業は。

理由はどうあれ、自分にもまだ個人の内面へ向けたささやかな執着心があったのだと、内心驚いた。そして心中に湧く衝動を抑えきれずもう一度声を荒げた。

「誰か、いないのか」

「ここにあります。お呼びですか、ロイス様」

廊下の奥から男が無骨な音を鳴らして馳せ参じた。目を凝らして見れば簡素な鎧と脛当てを身に着けており、腰のベルトに細身の曲刀を佩<sup>は</sup>いている。

「お前は……………そうか」

先日、ロイスが古代人の当面の夜間護衛にと銀貨をちらつかせて配置換えさせた兵士だった。脳内見取り図は既に役に立たなくなっていたが、どうやら向こうは客室が並ぶ離れへと続いているらしい。

「娘はまだ起きているのか」

「ええ、まあ。ですが…………」

「少し話がしたい。部屋へ案内を頼む」

「しかし」

衛兵は一瞬うろたえたが目の前に立つ主人が素面<sup>しづめん</sup>でないことを悟るや、即座に口を噤んだ。己の正義と保身を比べた後に得る利益は明白だったようだ。唸るように了承の返答をしたあと静かに道を開けた。

「こちらです。どうぞ」

不規則な靴音が闇に溶けていく。

果たして夜分に年若い娘を訊ねる行為は下世話な醜聞にならぬのだろうか、という良心の叫びは、もはやロイスの耳に届かない。

なけなしの理性すらあったのだろうか。こうなってしまうては、大いに疑問である。

## 10・祝いの夜・後編（後書き）

遅くなりました。次回更新はミツルのターンです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5149q/>

---

悠久のエリアス～潮騒《Paranatura》～

2011年11月11日21時31分発行